
Marchen der Prinzessin ~ お姫様の御伽話 ~

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Marchender Prinzessin お姫様の御伽話

【Nコード】

N4284H

【作者名】

ものもらい

【あらすじ】

色々おかしい古城の住人と、おろおろしてばかりの騎士様と、女王様みただけと案外繊細な魔女様の話。

0・まず始めに（前書き）

結構ふざけた紹介文なのでその所ご了承下さい。

読まなくとも支障はないです。読んでもそんなに意味は無いです…
はい。

0・まず始めに

！：この話は「僕らの日常SOS！」のキャラのパロディというか『こうであつたかも知れない』話です。

→の作品を読まなくても全然支障はありません。あと微妙に百合臭いかもしれないです。

百合嫌いとか百合って何？って人は見ない方がいいかもしれないです…いや、ちょっとだけ百合っぽい…かもー？って感じで行くって考えてるんでそんな酷くないはずです。…うん。

一応キャラ設定←

ルーシエット

・古城の魔女。

可愛い容姿で結構キツイ感じの性格。懐けばべったり甘えるけど嫌いな人には容赦なし。というか元は甘えん坊だったが幼少期がアレすぎてひねくれた系。

ちなみに彼女の『嫌いな人』は、この城の住人で言うところのクス君が堂々入ります。

でも時々優しさがちらっちら見えたりする。

ロスト

・王国の年若い騎士。

剣も凄いいし顔はいいし性格もいい…が、ヘタレ過ぎて色々台無しな

人。多分この人は不幸の神様に愛されてるんじゃないだろうか。

ルーシエツト閣下（笑）からは玩具代わりに遊ばれ、リーン嬢には美味そうと狙われ、クース君なんて時々殺す気で迫ってくるという……気の休まらない生活をこれから送ります。

リーン・ロッテ

・古城の×××。そしてクース君のご主人さま。
お腹が空くとんでもない事をしでかすお方。この城の中で何だかハーレム状態になってる。

ロスト君からは頼れて相談できるお姉さん、ルーシエツト閣下とは百合っぽい雰囲気があるし（一応は親友）クース君からはちよつと病んだ感じの想いを向けられております。

ちなみに彼女の辞書に無謀の言葉は載っていない。

クース

・古城の騎士。というかリーン嬢のげぼ…従者。

ツンデレデレでちよつぱりヤンデレが入ってる感が否めないお人。
そしてルーシエツト閣下からは「使えない男」「リーンの犬」との暴言が面と向かって言えるぐらい彼女とは仲が悪いです。

ちなみにロスト君は大っ嫌いです。地味にロスト君の死亡フラグを作ろうと画策中。隙あらば殺すをモロに出してるのもルーシエツト閣下から嫌われる理由の一つ。

もし気に入ってくれたらコメントがリクエストをくれると嬉しいです。

あと*ものもらいのブログの、

「We'll be like a star!」
http://kadu.blog.ocn.ne.jp/ave2910/では
作品のイラストや更新情報が更新されます。荒らしの方以外はどうぞ
お寄りください。

1・狂ったお姫様

昔々、ある豊かな王国の端に、深い森に囲まれた古城がありました。

噂では、その古城には何とも愛らしい魔女と、ぞつとするほどに綺麗な姿の女、そして彼女達に仕える人ならざる者達が、毎夜毎晩遊び暮らしているのだとか。

たとえ自分の腕に自信があろうとも、彼女達の元に行けばその美しさに、狂気に魅入られるのだとか、惨たらしく殺されるのだ、とも言われています。

興味半分に城に無断で入って命からがら逃げ出したある旅人が言うには、「森を穢した者や客人を、城の奥深くの拷問部屋で気分度様々に罰するのを見た」とか。

そんな物騒な噂が流れる、けれども至って何事もないある日、侍女から古城の噂を聞いた美しいお姫様は、確かめに行こうと従者と共に馬を駆って森に行きました。

国王夫妻に可愛がられ、大事に育てられたお姫様は巷の怖い噂も恐れずに、この森で禁忌とされる森を穢す行為——意味無く弓や猟犬を嚇けて兎や鳥を狩り、感謝も謝罪もせず、むしろもっと荒さんと森を駆けずり回りました。

しかしそんな事をしても、城の近くまで馬を走らせても、一向に魔女の姿は見えません。

飽きてしまったお姫様は、狩った獲物を従者に持たせて城へと帰る

うと歩を進めると、空から黒い羽根が落ちて来ました。

？罪深い王女、お前は今より呪われる？

その言葉と共に羽根が肩に触れた途端、お姫様は激しくひきつけを起こし、慌てて近寄った従者の持つ獲物達を見て奇声を上げて城に逃げ帰ったのでした。

*

？どんな呪いをかけてやろうか。お前の汚い舌が渴いて、その心臓すらも動きを止めるまで、殺された彼らの為に鎮魂歌を歌い続けるのはどう？？

？ああでも…それでも生温い。例えお前が死んでも死なさぬ。私が朽ち果てるまで永劫苦しめ——貴方なんて、大っきらい？

「なんということだ」

重々しく言う王様の傍らで、王妃様はあまりの悲しみに泣き崩れてしまいました。

二人の目の前では美しいお姫様が奇声をあげて侍女に押さえつけられ、その首は赤く掻き耂り肉が見え、その爪は赤く、口から零れる唾液はやがて赤い血と混じりました。

「あ、あの子…あの森に行ったとか……。きっとあの古城の魔女の仕業ですわ!」

「ああ、そうだろう。だが事を聞くに悪いのはこちら。何と詫びればよいものか…」

王様はそう言って黙り込みます。

ややあつてから王様は一人の騎士を連れ出すと、年若い騎士に言いました。

「騎士、ロストよ。お前が騎士の誓い立てを守るといふのなら、どうか古城の城主を説得して来てはくれないか？」

「…御意にございます。必ずや、姫様を元に戻して見せます」

年若い騎士はそう言ってスッと顔を上げます。

どこまでも真っ直ぐなその瞳に、王様は胸が痛む思いでした。

外では王妃の命によって、首を切られた侍女に群がる鴉の音が、響いておりました。

*

「また悪戯ですかー？」

腰の中程の長さの、美しい金髪の少女。

魔女にお小言を無謀にも言っ**て**ヒビを入れられた鏡の、そのヒビを、彼女はそつとなぞりました。

「……怒った？」

魔女は大きな赤い皮地に黒の猫足の椅子に、行儀悪くも片足を立てて座り、生気のない眼をした執事から紅茶を淹れて貰いました。

「……………」

「いいでしょう？別に。あの女は禁忌であると知っていて森を穢した」

「…そうですね」

「あの女にはああしてやりたくてしょうがなかったのよ…？…ふふっ、楽しかったわ」

「そうですね」

「…さつきから『そうですね』しか言っていないわよ？」

この時を虎視眈々と狙い、報いる事に成功した魔女は、話し掛けたくせにつれない親友に、膨れた顔を向けます。

するとつれない親友は、カツカツと魔女の向かいの席に腰掛けて淹れられた紅茶に手を伸ばしました。

「ちよつと…『ウチの子』が不機嫌で…ほら、満月が近いでしょう？生理中の女の子みたいにピリピリしてるんです。どうしましょう」
「…その喻えってどうなの？」

「だって、そうとしか表現が…今は薬を飲んでベッドの中で丸まってるんです」

「軟弱者ね。…使えない犬を飼うなんて、貴女もモノ好きよね」

「おや、心外です。あなたも、『私みたいなの』を友と呼ぶんですから…モノ好きですよ」

魔女とその親友は互いに笑いました。すると魔女の鏡がほのかに輝いて城のある一室の風景を映します。

魔女はそれを見て、白磁のカップをくいと上げて、言いました。

「今夜は楽しいパーティね。…どんな歓迎をしましょうか？」

*

(これであの日から止まったままの、『私の童話』が始まるの)

1・狂ったお姫様（後書き）

＊ものもらいのブログの、

「We'll be like a star!」<http://kadu.blog.ocn.ne.jp/ave2910/>では作品のイラストや更新情報が更新されます。荒らしの方以外はどうぞお寄りください。

2・夜に出会う、

「こんばんは、騎士様」と、目の前の少女は微笑んだ。
その笑みがあまりにも綺麗で、ロストは先程感じた恐怖も違和感も忘れて、つられる様に微笑み返した。――「こんばんは、お嬢さん」と。

*

騎士ロストは追い出されるかのように馬を駆って古城へと歩を進める。

時刻は夕暮れ。

何故この時間に古城へと向かっているのかというと、ヒステリックに周りに当たり散らす王妃の命故であった。

――明日にでも例の古城に訪ねようという事で話が決まっただけなのに、呪われた娘のあまりの哀れさに耐え切れなくなった王妃が夕暮れだというのに彼を古城へと向かわせたのだ。

支度もままならないままに出てきたロストの荷物は、念のために入れた、数枚の衣類と剣、パンと水に王よりの魔女への詫びと願いの

籠った贈り物、そして部屋にあった十字架と聖水だけだ。

彼がこの最低限の荷物を詰め、聖書の本も入れておこうかと手を伸ばした所で王妃からの命が言い渡された彼は、自分の首が斬り落とされるかもと、三日も必要とする旅路だというのに慌てて荷物を纏めて馬に乗せ、逃げる様に住み慣れた城を後にした。

もう少しぐらい遅く出ても良い様な気がしたが、何故か彼は王妃に嫌われている風だったので、大目には見てもらえないだろうとその考えを消した。

もしも下手をして首を斬られれば、あの王妃のことだ、涼しい顔で後任の者を適当に探すことだろう……あの侍女のように。

——そうして逃げる様に駆け抜け、陽が落ちてゆつたりと沈む頃、彼は町から離れた、民家も無い一本道を黙々と駆け抜けた。本当は先程通った町の宿にでも、と思ったのだが、時間が時間なだけに混んでいて、相部屋位しかなかった。流石に王よりの品を持っているのに相部屋は勘弁願いたいし、王から頂いた多めの金を使つて、多分空室があるだろう贅沢な宿に泊まるのも、「もしも」の事を考えると気が引ける。

なら明日まで駆け抜けて、古城に近い町で休みをとろうという考えな訳だが、ひたすら続く暗い道は、引き返そうかと思わせるほどに不安を感じさせる静けさで、恐ろしかった。

——そのまま駆けていると、遂に馬が根を上げた。
愛馬を潰すわけにもいけないので、彼は道の端に馬を寄せてしばらく休むことにする。

喉が渴いて水筒に手を伸ばそうとすると、からからと馬車の車輪の音が聞こえた。

誰だろうと音の方に振り向いた瞬間、ロストはぞくりとしたものを感じた。

それは恐ろしさというか、違和感のような、「あつてはならない」ものに近くて、異端さを感じる。関わってはいけない様な気も、した。

「…失礼、」

微かに夜の闇から聞こえた声は大人びた少女の声。少女と淑女の間で、午後の陽のまどろみの様な、人を安心させるような声質だ。

「あ……と、」

昔から不思議で妖しいものに声をかけて良いオチだったお話は少ない。

服の下に隠れた十字架を握り、返事を返すべきか悩みながら、ロストは声の先をじっと見定めようと目を細める。

すると運良く月が雲から現れて、辺りをほんのりと照らし、月光でどこか輪郭のぼんやりとした馬車が、彼の目に映った。

——現れたのは、夜に同化する様な、繊細な造りの黒い馬車。

繋がれた馬すらも黒く、馬車の窓枠も黒く、優雅な曲線を描いている。

カーテンすらも黒で、少しも中の明かりが漏れる様子が無い。明りを付けていないのだろうか。ロストは頭を傾げた。

「——失礼ですが、あなたは騎士様でしょうか？」

もう一度カーテンの向こうから声がする。ロストはじりじりと距離を開けて十字架から剣に手を伸ばした。服の下で揺れる十字架がやけに冷たく肌に触れる。

ごくりと唾を飲み込んで、ロストは「そうですが」と堅い声で答えた。

すると今度は「ロスト様ですか？」と聞かれ、ロストはそれにも「そうですが」と答える。

そこで、ほっと息を吐くように馬車から「ああ、無事会えた」と咳く声が聞こえ、暫く静寂が訪れる。

耐え切れなくなつて、ロストが「あの、」と声をかけようとした瞬間、ぎぎぎと馬車の扉が——従者が開けたわけでもなく——開いた。

あの声の主が開けたのかと思えば違った。暗くて見えないが、ほっそりとした白い腕は扉に伸ばされておらず、膝に置かれていた。

するり。

たつぷりとしたドレスにも関わらず、声の主は綺麗に音も無く着地した。
月光にぼんやりと照らされた声の主は、優雅に笑みをつくり、こてと首を傾げてその綺麗な金の髪を揺らした——ただただ綺麗な大人びた少女だった。

*

「——騎士様は、あの子の城に向かっているのでしょうか？」
「え、」

唐突に少女は言って、一步ロストの方に歩み寄った。
すると何故だか近寄ってはいけない何かを感じ取って下がってしまった。

それを見て「…敏感な子」と少女が呟いたのを、ロストは何とか聴きとった。

「あの、今、」
「…ああごめんなさい。急に現れて吃驚させてしまったかもしれないですが、危害を加えるような者ではないのです」
「は、はあ」

優しい声の少女は、その言葉通りどうにも自分に危害を加える風には思えない。

戸惑いながらもロストは目の前の、違和感を感じる少女への認識を改めた。

——きつと感じた違和感はその馬車のせいだ。あの夜に溶け込むような色。馬すらも黒いから、急に現れた様に感じただけ。少女の身軽さだって、ただドレスが軽かったとか…重そうなドレスだけだ。

それに目の前で黙りこくった自分を、きょとした顔で見る彼女は先程よりも人間らしさを感じて、不信感というものは薄れてしまった。

「あの…？」

「あ、あすいません。…お嬢さんは何て名前なのですか？」

「あ、申し遅れました。リーンというのです」

「そうですか…リーン嬢？」

「そんな畏まらないで下さいな。呼び捨てでかまいません」

「…ではリーンさんと呼んでも？」と聞いても「呼び捨てで」と返すので、ロストは「じゃありーンちゃん」と言えば、「呼び捨てでいいのに…」と言いながらもそれでいいと答える。

一回気安く呼んだせいか、何だか先程よりも親しく思えてきた。

「綺麗な名前だね」

「ありがとうございます」

「…敬語で無くてもいいんですよ？」

「いえ、癖なんです…」

ふふ、と和やかに二人で話していると――急に馬車の中からカチャリ、と音が鳴った。

ロストは聴き慣れたその音に、聞き間違いであつたことを希望しなくなった――あれは剣を抜く構えの時にする音だ。

固まったロストに対してリーンは平然としている。

どうやら馬車の中にはもう一人いるらしい。

「ごめんなさい、早くしないと怒りだしそうなので、本題に入っても……？」

「あ、ああ、ごめん」

「いいえ、」

そしてリーンはふと笑って、「お迎えにあがりました」とだけ言った。

「…お迎え？」

「私の親友…古城の主が私にあなたの迎えを頼みまして」

「古城の…主ってあの…魔女さんが？何故？」

「ん…流石に王よりの使者を…迎えに行かない訳にもいかないと…」

歯切れ悪くリーンは言う。しかしロストは気にせず、むしろこれは有難いと微笑んだ。流石に三日も馬で駆け続けるのは嫌なのである。

「ありがとう！…あ、でも…俺の馬が…」

「それならば従者にひかせましよう。よろしければどうぞ、馬車に」

「…じゃあお願いします」と頭を下げ、上体を戻すと——すでに黒い燕尾服を着た従者二人が、ロストの愛馬を牽いて荷物を運んでいた。

「さあさ、早く」

リーンはほっそりとした手が、恐る恐ると伸ばすロストの手を引いて馬車へと招いた。

馬車の扉の前で彼女は一回手を離して、背伸びをして扉に手を伸ばす。

何だかその仕草に可愛さを抱いたロストだったが、すぐに従者に台を頼もうと従者の姿を探した。

すぐに見つけた従者は、黙々と馬を繋ぎ荷物を乗せようとしていてこちらに背を向けている。

そのうちリーンは諦めてしまったようで、数歩下がってしょんぼりと短い言葉を、名前の様なものを呟いた。

すると馬車の扉がぎぎと開いて、近寄ったリーンの身体をひよいと抱きあげた——その人は、不機嫌そうな顔でロストを睨んだ。

「あ……」

——青白いその顔はとても美しく、赤と金の瞳は彼の芯の強さを語っている。この人が剣に手を伸ばした人なのだろう。

「……」

「……」

何だが同乗することを拒まれそうな気がして、ロストは数歩下がる。しかし不機嫌な彼は意外にも「早く乗れ」と低く言うのだった。

「騎士様早くー」

「いや、あの、台は……?」

「無様に乗るがいいさ」

けつと彼はロストを見下ろす。色んな意味で。

それと対照的に、リーンは優しい口調で「ああごめんなさい」と言って従者に台を持って来させた。

最初からそうすればいいのではとロストはこそっと思っただが、少し天然な人なのだろうと思い、大人しく台に足を乗せた。

ちらつと馬車の中にて座る二人——車内に備えられた明りを点けると振り返って微笑むリーンと、刺々しさを隠しもしない青年——を見て、ロストは早くも居心地の悪さを感じるのだった。

（お迎えは魔女の馬車、
）

2・夜に出会う、（後書き）

* ものもらいのブログの、

「We'll be like a star!」
<http://kadu.blog.ocn.ne.jp/ave2910/>では
作品のイラストや更新情報が更新されます。
荒らしの方以外はどうぞお寄りください。

3・馬車の中で

「……………あ、はは……」

にこりと微笑む彼女に、腕も脚も組んでこっちを睨む青年、乾いた笑顔を貼り付けて冷や汗をたらたらと流すロスト。

——馬車の中は何と言うかとても…カオスだった。

険悪な空気を出す青年とそれに怯えるロストの二人は、お互いに自分から口を開こうとしない。

その空気に気付かないリーンの楽しそうな声が異様に車内に響いた。

「ねえ騎士様」

「う、うん？」

「質問ばかりでごめんなさい。あの、…お城の外ってどんな街があるんですか？」

「へ？あ、えー…っと、俺もあんまり出た事無いからアレなんだけど、結構賑やかで、西の城下町じゃあ市が有名なんだ」

「どんなの売ってるんですか？」

「あそこは道の整備が良いから…結構新鮮な物が多いかな」

——先程からリーンはこの手の質問をしてくる。

最初は好きな物から嫌いな物、お勧めの本だとかから、今の様に『外』の事を聞く。仕草がとても優雅な人だから、外にめったに出さ

れないお嬢様なのだろうかと思って尋ねれば、昔は結構外に出歩いていたらしい。

しかしリーン曰く『病氣』で最近は滅多に出歩けず、今日は体調が良かったから友人…古城の魔女の頼みごとを引き受けたのだと言う。

「病氣…大丈夫なの？ 苦しくないかい？」

「大丈夫です。そんなに難しい病氣ではないのです…ただ、その…時折、倒れてしまったり」

「倒っ！？」

倒れてもしばらく休んだら全然平気なんです…とリーンは何でもなさそうに笑う。

「早くお外に自由に出入りしたいです…」と外の世界に心を馳せるリーンの隣で、青年はリーンが外の話題に興味を示せば示すほど不機嫌になってゆく。

さすがに怖い、とロストは目を反らしながら思った。

そこでこの話から脱却しようと、ロストはさつきから気になっていた『古城の魔女』についてリーンに尋ねてみたのだった。

「可愛い子です」

「か、可愛い子…？」

「笑うと子猫みたいで、とっても愛らしいんですよ？」

「へえ？」

「一回懐くと結構甘えてくるんです。寂しがり屋さんで無邪気で、」

「残酷で恐ろしい奴だよ」

「へあ！？」

少し安心していたロストの心にぐさりと刺してきた青年はリーンに咎められてもなお、嫌味な笑いで言った。

「嫌いな奴はとことん嫌う…この前なんかどつかの貴族の次男坊がカエルにされて窓から放り投げられてたしな」

「ほ、放り…」

「はたまた絹の布に変えられて何度も刺繍針で縫われたり。薔薇に変えて散らした——痛えっ！」

「もう！クーのお馬鹿！」

頭にチョップしたリーンを睨む青年だったが、やがてブイツとそっぽ向いてしまった。

そんな彼に溜息をついた後、リーンは「違うのです」と言っしどるもどろに続けた。

「…騎士様、その件は…彼らが無礼であり危害を加えようと…その…騎士様なら大丈夫ですから。そのままのあなたであれば、大丈夫ですよ」

「あ…う、ん。分かった」

そこで静寂が馬車を包む。

目を少し伏せたリーンはそれだけ言って黙って馬車に揺られていた。余計に気まづくなった空気の中、今度はロストが恐る恐る口火を切った。

「あー…その、二人の事、教えてもらっても…？」

「え？…あ、そうでした。クー、自己紹介してくださいな」
「…なんで」

「これから長い付き合いになるかもしれないですよ？」

「はっ、その男があのかきの御不興を買わなかったら、だろ。必要無い」

「…クー、いい加減にしなさい」

——少し低めの声でのそれは、先程のものよりかなりの迫力があつた。

思わず男二人がたじろぐと、ややあつてからリーンは微笑んだ。

そしてその微笑みのまま青年に自己紹介を、と再度促す。

それに青年は今度こそ素直に応じた。

「クーすだ…リーンの…護衛、みたいな」

「私の騎士さんなんです」

「あ、そ、そう…なんだ」

よろしく。とロストが手を差し伸べると、クーは一回リーンの顔を見て、苦虫を噛んだような顔で応じた。

すぐさま手を離す彼の頭を、不意にリーンは撫でた。

「よしよし。クーは良い子良い子」

「う、うっせー！」

「…（仲良いんだなあ…）」

白い頬が少し赤いクーと優しく笑うリーンを見ながら少し和む口

スト。

今度はぼやぼやとした空気が馬車の中を漂い始めると、急に道が荒くなった。

何となしに厚いカーテンを除けて覗いてみると、月明かりに照らされた古城の姿が少しだけ見えた。

「……早いだね」

「ええ。だって魔女の馬車ですから」

意味深にリーンが答える。

「魔女の馬車、かー」とロストが呟いてきよろきよろと車内を見渡すが、高級さを除けば特に他の馬車と変わらない感じがするのだった。

そんなロストの心が知れたのか、リーンは歌うようにからかった。

「まさか、騎士様の御想像する『魔女の馬車』って…かぼちゃの馬車ですか？」

「へ！？い、いや——…うん、そう…だけど…」

「何歳だよお前」

「…いいじゃないですか、どんな想像を抱いてても…ふふっ」

「リーンちゃんまで！…」

正直に自分の想像図を言えば、これまでの態度からクースが冷たく何か言うだろうとはロストも予想出来ていたけれど、リーンにまで笑われるとは…結構恥ずかしい。

ロストは「ううう…」と反論できなくて唸る。

——そんな三人の声が漏れる馬車を、月が静かに照らしていた。

＊

「鏡よ鏡。騎士様は何処へ？」

「それは魔女様、貴女のお膝元に」

「鏡よ鏡。あの忌まわしい姫は如何に？」

「それは魔女様、貴女の思いのままに」

——蝋燭がぼんやりと灯される部屋で、彼女は、
…魔女は罫
の入った鏡にそう問いかけるのだった。

魔法の鏡が映すのは、魔女が憎くてしょうがない呪われた姫。
掠れた声で息も絶え絶えに悲鳴を上げ、豪華な寝具の上でのた打ち
回っている。

…不意に、鏡の縁模様をなぞっていた魔女の白い指先が姫の元へと辿り着き、

「——呪われろ」

その魔女の一言の後、奇声が、絶叫が、鏡の内から響く。

「こんなものじゃないわ。こんな安い痛みで許したりしない」

歌うように魔女の愛らしい唇は呪いを吐く。

鏡の隅には己の娘の身に降りかかった禍に嘆く母。それを嘲笑いながら魔女は更に笑みを深めた。

（長い時間だったけれど、これでやっと手が出せるわ）

（なにせ騎士は魔女の掌の中。呪われた姫も私の掌の中）

待ちに待ったあの願いが、もう少しで叶う——その喜びに、魔女は愛しい親友に今朝話した自分の昔話を思い出す。

「あともう少しで、約束が果たされるの」

「だから、」と魔女は鏡の中の彼にキスをした。

＊

（魔法の鏡には愛しの君）

3・馬車の中で（後書き）

＊ものもらいのブログの、

「We'll be like a star!」
<http://kadu.blog.ocn.ne.jp/ave2910/>では
作品のイラストや更新情報が更新されます。
荒らしの方以外はどうぞお寄りください。

4・魔女の微笑み

—— 黒い黒い馬車は夜空を飛んでいた。

車輪からはきらきらと銀の粉が散り、馬車の跡を僅かの間だけ残す。もしもロストが見れば、感動の声を上げるだろうその幻想的な美しさは、深い黒のカーテンで隠されている。

けれどもカーテンをめくろうともしないロストは、リーンとクースの和やかな会話をうとうとしながら聞いていた。

「ねえクー？明日の朝ご飯、何でしょうね……」

「あー…確か魚じゃないか？…曜日的に」

「…（曜日制なんだ…）」

「魚…あんまり魚は好きじゃないのであげます」

「お前な、俺はお前の残飯処理係じゃないんだからちゃんと食べよ」

「だって生臭いんですもの」

「シェフに言え」

「えー…」

ぷう、と頬を膨らませてリーンが拗ねた声を出すと、たしなめるクースの声がロストの耳に入る。

ぼんやりとながら、リーンには面倒見いいんだな、とロストは先程までのクースの冷たさを振り返りながら思った。

「…それに、食べなくなつて別に、あなたがいれば死なないですし」

「……別に俺じゃなくてもお前は生きていけんだろ」

（おおっ！？情熱的な言葉をそっけなく返した…！？）

「むう…」

ちらつとリーンを見れば膝を抱える腕に顔を埋めてそっぽ向いてしまっている。

「……言い返せよ…」

若干呆れた声でそう言つと、コースは整ったリーンの髪をぐしゃぐしゃと撫で、溜息をつく。

対するリーンはぐしゃぐしゃになった髪を手櫛で直しながら小さく唸りながらもチラリとコースの顔を盗み見た。

それにコースが何か言おうと口を開けた瞬間、がくんと馬車が落ちる。

がしゃん、と音をたてて夜空から地面へと着地する馬車は、少し激しく揺れた位ですんだ。

その後何もなかったように小路を進むと、門が開く音が厳かに響き、着いたことを告げた。

「着きましたね…えと、」

「ん、」

しばらくして馬車が止まると、リーンはおどおどとコースを見る。そのコースはリーンが言おうとした事を——一つ頷いて、静かにドアを開ける。

そしてロストに降りる様に顎でしゃくると、続く様に降りてリーンの為に台を出させて降ろさせた。

そしてリーンがそつと足を乗せ、転ばない様にその腕を掴む。とてん、と地に足を着けたリーンは、ちよつと見惚れてたロストに微笑んだ。

「騎士様。古城によっこそお出で下さいました。さあ、中に」

「ああ、うん…」

リーンの後に続きながら、荘厳に佇む古城を見て気後れしてしまう。

それでも歩を進めると、やがて玄関の——大きな扉に辿り着いた。

「よっこそお出で下さいました」

ふかぶかと頭を下げる執事二人に軽く会釈をしてやつと城内に入ると、ロストは思わず感嘆の声を上げてしまった。

「うわぁ…！」

——古城と言うからきつと薄暗いだろうと思ったが、どれもとても明るく輝いている。

大理石の床は反射するぐらいに磨かれているし、シャンデリアの純金やダイヤモンドは煌めいていて眩しい。

薄茶と金糸で彩られた壁には有名な画伯の絵が所々飾られていて、それと同様に飾られる薔薇も瑞々しく美しい。花瓶もどれも高そう

だ。

そしてきよろきよろしながら踏み歩く赤い絨毯は新品同然に綺麗で、歩くのが少し申し訳なく思った。

「……………」

——— 一通りそんな感想を終えると、ロストは中央階段の手摺りに寄り掛かる様にして此方を見る人物に気が付いた。

「…女の子？」

近づくにつれて少女の姿がよく見える。

白い薔薇が零れ落ちそうな程盛られた魔女帽に、それに合わせた赤いマント、繊細なレースが美しい服。そして夜の様に真っ黒な髪はくるくると巻かれている。

「わざわざありがとう、リーン」

花の様に可憐な声がそう述べると、リーンはいいえ、と言って脇に退いた。

「騎士様、この子があなたが会いたかった古城の魔女です」

にこり、と笑う魔女の紫の瞳に、ロストは思わず時間が止まってしまった。

「…『きげんよう？』」

「は…あ、あの…」

小首を傾げて此方を見る魔女をただただ見つめながら立ちつくす。動悸は早くて息もままらないし、更に困ったことに次の言葉が出ない。息を吸って、とりあえずお決まりの挨拶をしようと片膝について頭を垂れた。

「お初にお目にかかります、俺——自分は、王国に仕えます近衛騎士の……」

「……知っているわ」

先程まで薄ら頬を染めて見つめていた魔女は、悲しげでどこことなく寂しげな顔を見せた後、不遜にそう口上を切った。

思わずビクついて「そ、そうですか……」とオドオド言えば、次の言葉が更に迷って出てこないのに焦る。

その心中が分かったのか、魔女は気を取り直して穏やかに尋ねた。

「道中、何もなかったかしら？」

「あ、はい！……すごく……快適でした」

多分、なんてこっさり付け足すも、ばつちり魔女様には伝わっていないらしい。

「ふうん？……流石リーンの駄犬ね、客人に気をつかわせるだなんて」

「だ、誰が駄犬だっ！」

「……ごめんなさい騎士様。迷惑をかけてしまって……」

「リーンが謝ることないだろ！俺達は何も悪くないんだから……なあ？」

「は……はいっ」

即、頷いたロストは「本当に…楽しかったです」とだけ言うと、睨みつけたクースの瞳が少し弱まる。

脅す自らの従者を見れなかったリーンは、ロストの言葉でしょげた顔を元に戻した——瞬間、何故かその瞳が、歪み、霞がかかる——

——あ、もしかして、緊張の糸って、奴　　が　　——

「騎士様…？」

最後に聞いたのはリーンの不思議そうな声だ。

*

——暗い、暗い部屋で、誰かが泣いている。

「あら、起きたの？」

その声にぼんやりと顔を向けると、古びた本に目を向けたまま、魔女が紅茶片手にそれだけ言った。

もう泣き声は聞こえない。思わず声に伸ばした手は宙を掴んでいた。

「……………」

何してたんだっけ、とロストは身体を起こして状況を確認し始めた。見回せばベッドの隅に自分のコートや荷物、剣が置かれていて、緩められた首元に手を当てて、ああ倒れたのだった、と思い出した。

「ありがとうございます。わざわざ…見ていただいて」

「気にしないでちょうだいな。私もさっきまで寝ていたから」

「あ、……はい」

そうして魔女は紅茶と本をテーブルに戻し、椅子に深く座り込んだまま、唐突に告げた。

「——私に敬語はいらないわ」

「え…」

頼杖をつく魔女は、「そんな訳には」の言葉を一睨みで制す。

何故か俺が喋ると彼女はどんどん機嫌が悪くなってる気がする…と居心地悪く思いながら、ロストは黙って頷いた。

「良い子ね。…で、騎士様。調子も戻ったようだし、貴方のお仕事を果たしたらどう？」

ふふ、と大人びた笑いをする魔女はそう言って、白く細い指をくいと曲げた。

すると白銀の光りをきらきらと引き連れて、ロストの荷物から王よりの手紙が魔女の手に躍り出る。

魔女は手紙に触れる事もなく、その指を宙で横に切り——封蝋

だけが溶け、するりとびっしり書かれた文書が魔女の手に落ちた。

「……ふうん……？ねえ貴方、この手紙の内容、知ってる？」

「いえ……いや、知らない、けど……」

そう、とだけ言うと、魔女はその手紙を燃やしてしまった。

「ちょ……！」

「ねえ貴方」

思わず手紙に手を伸ばしたロストの武骨な手に、するりと魔女の白く傷一つない手が絡む。少し距離のある椅子から瞬間移動でもしたのか、急に近くに現れた魔女にビクついてしまう。

そんなロストにもかまわず、銀の燐粉を微かに纏って、魔女は笑う。所謂恋人つなぎ、の手だ。魔女はもう一方の手を、ロストの少し汗の浮いた頬に添えた。

「貴方————王国から売られたわよ」

*

（騎士はまたもや気が遠のいた）

4・魔女の微笑み（後書き）

＊ものもらいのブログの、

「We'll be like a star!」
<http://kadu.blog.ocn.ne.jp/ave2910/>では
作品のイラストや更新情報が更新されます。
荒らしの方以外はどうぞ
お寄りください。

5・君の名前

「…売ら…売られた…？」

「ああでも、捨てられた、とも言つべきかしら…だって、娘を助けてくれるなら、貴方をどう遊ばうとかまわない———そう書いてあるもの」

「…っ」

…確かにそれは捨てられたかもしれない。巷では残酷で名が通っている魔女に、どうしようがかまわない、何て言われた日には虐め殺されそうなものである。

泣きそうな顔になったロストに気付いた魔女は、まるで甘いお菓子を見る少女の様に微笑んだ。

「大丈夫。貴方はとても綺麗な顔をしているから———私の人形にしてあげ……ん？」

その発言に余計泣きそうになるロストの足下へと、不意に魔女は目を向ける。

頬に添えられた手が退かされたので、ロストも同じく目を向けた。

「あ……」

視線の先でよろよろと出てきたのは一通の手紙。どこもかしくも折れてよれて痛々しいそれは、魔女の綺麗なピンクの爪で弾かれた。

「小汚い手紙」

「いや、虐めないでやってくださ…あうっ！」

ぺしぺしと手紙を苛める魔女にそう言えば、魔女はロストにまでデコピンをかましてきた。

「…まあ冗談はこれまで。ほら、中身出しなさい」

「中身……」

今、恐怖心でいっぱいはいないか、それとも魔女の黒い笑みのせいか、その時ロストの脳裏には内臓をぶちまける図が出来あがってしまった。…が、現実とは先程と同じく——封蝋が溶け、するりと手紙が現れた。

「……チツ。さっきの手紙は王妃からか」

「じゃ、じゃあ…！」

王妃に嫌われているのは分かっている（理由は知らないのだが）。だからこそあの文だったのだろうし——陛下ならば、とロストが期待に胸を躍らせると、魔女は目の前で手紙を破いて塵と化した。

「ふん…運がいい子ね。王妃が何と言おうと貴方は返して欲しいですって」

「陛下ああ一生ついていきます…！あ、あの、これで帰れ」

「——いいえ？」

くいつとロストの顎を指先で持ち上げ、深い紫の瞳と視線が交わる。

美しいその紫からは、何も読み取れなかった。

「——条件があるわ。これさえ出来たら貴方も無事に返すし、あの女の呪いも解いてあげる」

「本当ですか！何でもします！だから…！」

「ちよつと、近い」

「ぷふっ」

両頬を掴まれて苦しいがるロストを鼻で笑ってから、魔女はそのまま突き離す。

ふう、と息を一つ吐いて傍にあつた椅子に深々と座り込むと、頼杖をついた。

「貴方にしてもらう事についてはまた後でね。こちらにも色々あるの」

「あ…はい」

「あつちにもその旨を伝えとくわ。貴方もそのつもりで挑めばいいし、それまでの間この部屋を使って頂戴」

「え、こんな良い部屋使つていいんですか！？」

「勿論。不便な思いはさせないわ」

言い切ると欠伸を一つ零し、魔女は静かに立ち上がった。

「まあ、今はゆっくり休みなさい……もう朝になってしまっし、部屋に戻らせていただくわ」

「りょ…了解です」

「何かあつたら女中にでも申し付けて。城の中なら…まあどこでも

うろついていいけど、地下室には行かないよう」

その言葉にひっかかって、目元を擦る魔女に「何故？」と尋ねると、「腐った先客を見たいならどうぞ」とだけ。

ロストは勿論それにぶんぶん首を振って布団にもぐると、魔女の白い手がぽん、とロストの頭に置かれた。

「良い夢を」

「……うん」

ふ、と微笑んだ魔女に思わず見惚れていると、彼女は「じゃあ」とスカート揺らして去ろうとする。

その動きに合わせて揺れる黒髪をただ見つめていたロストは、何故だか思わず——身を乗り出して、一歩踏み出した魔女のその白い手を、掴んだ。

「……」

「……」

「……何？」

「いや、あの…自分でも…わからないです」

「……」

自分の奇行のせいで重くなった空気に耐えられず、ロストは目を伏せた。頭の中ではどうするべきかと悩みに悩む。

——そして不意に、自分は魔女の、この少女の名前を呼んでいなかったことに気付いた。

確かリーンが言っていたその名は、

「ルーシエット……様」

「……何かしら」

「あの、君……いや、あなた……君？」

「……君、でいいわよ。さっきも言ったでしょう、畏まらなくていいわ」

魔女は、ルーシエットは溜息交じりにそう言った。

「そうだったね……あつと、じゃあ……君のこと、何て呼べばいいのかな……？」

「……………」

そこで魔女の動きは止まる。

暫く口を開けては閉じて——ぼそり、と小さな声で答えた。

「ルーシエットでも、ルシエ、でも。……どちらでも」

「ん。……じゃあルシエ、おやすみ！」

「……ええ、おやすみ」

もう少しで「おはよう」の時間だけど、とお互い思いながら、ロス
トは目を閉じ、ルーシエットは今度こそ扉の向こうに去って行った。

＊

次に目覚めたのは昼頃。

黙々と食事をテーブルに乗せる顔色の悪い女中を心配しながら、ロストは気まずい空気に耐えかねて、「他の皆は一緒じゃないの？」と聞く。すると「皆様は各自お部屋でとられるそうです」と静かな声で返された。

（美味しそうな食事なんだけど……）

静かでどこか暗い部屋で食べると、美味しさも半減してしまう、よ
うな。

…少し寂しさを感じながら、ロストは部屋で一人食事をとった。

「——…ごちそうさま」

食器を下げる女中から目を離し、なんとなく部屋の中を色々見回し
ては「もう少し慎ましい部屋で良かったのに…」とこんなに良くし
てもらって贅沢な気もするが、一つだけ溜息をついた。

「それでは失礼します」

綺麗に一礼をする女中に慌ててロストも軽く頭を下げると、不意に
視界の端に赤い花弁が映った。

「わあ……！」

風に舞うそれは深紅の薔薇で、ロストはベランダに近寄ると手摺を掴んで下を覗き見る。

そこには綺麗な薔薇園が続いている——その向こう、白い薔薇が咲き誇る園を横切るようにある外廊で、不意に黒髪を見た。

（誰だろう……ルシエかな？）

よくよく目を凝らしてみれば、そこに居るのはクースではなからうか。

——もしも彼でなかったとしても、暇つぶしにはちょうどいい。そう結論を下したロストは、急いで外に向かった。

*

（少しでも仲良くなりたいな、って）

5・君の名前（後書き）

外廊のイメージはこうヨーロッパの古い橋を建物と建物の間にはめ込んだ（？）ような感じだったんですか、何か違うようですね…ごめんなさい。

小話：『やっぱり君が好きだ』

昔、クースには『恋人』がいた。

身分や家の都合で結ばれる事が出来なくなった時、彼は色んなものを捨ててその『恋人』と手と手をとって逃げだしたのだった。

その逃避行は当然、物語のように軽やかにはいかない。

当時はそれほど治安が良くなって、何度肝を冷やしたことだろうか。恋人が生粋の令嬢であれば、途中で泣きだすか恋が冷めて家に帰ると喚いたかもしれない。

けれども恋人は怯えつつも泣き言も言わず、クースの腕の中でずっと急く彼を労わっていた。

そんな金持ちと見られかねない馬での旅は非常に危険だったものの、結果的には早く実家からの追っ手を撒く事ができた。

「少し休んだ方がいい」と心配する恋人の言葉にやっと頷き、束の間の安らぎを得ていたある夜の事、

——化け物に遭った。

（……。

が、

の。

じゃあ、）

死んでよ。

彼が『人間』であつた頃の、最後に聞いた言葉が、それ。

視界は霧がかり、身体は冷たくて、けれど溶けそうなほどに熱く――
――固まっているだろう彼女に声をかけようとしても、この口からは血が零れるだけで「逃げる」なんて、言えなかった。

――そうして次に目覚めた時、恋人はいなかった。

……繋いでいた馬は骨に、二人で肩を寄せ合つた家は蔓が巻き付き、屋根は所々空を覗かせる酷い有様に。

逃げる際に勲章も鎧も売り払つたが、それでも手放さなかつた剣は錆びて使い物にならない。

賊にでも襲われれば死んでしまうと、一度死んだ癖に『死』に怯えた彼は、すぐさま家に戻つて得物を探し始めた。

……恋人の事は、この時点ですでに諦めていた。

（お前――、

か？

を……………たのか…）

部屋を荒していった彼は、そこでまた『化け物』に出会ってしまった。

血だらけの姿で眠りについていたらしい化け物は、クースを殺した化け物では無かった。

しかしクースが恐れてやまない『それ』の気配を色濃く纏った化け物は、無害そうな顔でクースの問いかけを無視して言うのだった。

（あなたはだれ？ここはどこ？……………わたし、は）

少し枯れた声で、そう訴える『彼女』は、

これから先、ずっとクースの頭を悩ませることになる少女、リーンだった。

「あれ」から幾百と経るまで、リーンの生き方は血生臭くもあり、素朴であつた。

一文無しの自分達だつたけれど、美しい彼女は遊び好きの貴族の目に留まればすぐ館に招かれる。
クースはちやほやとされるリーンの「従者」という名目で傍にいて、その恩恵に授かつて日々を生きていた。

ちなみに、甘やかされても何を与えても自分を愛そうとしないリーンに、躍起になつて様々な贈り物をしては気を引こうとする彼らだったが、実は一度として彼女に——その唇にさえ触れた者はいない。

例え無理にでも触れようとしても、リーンの瞳に映つてしまえば誰も彼も彼女に屈し、人形か道化のように玩ばれる——『化け物』だからこそ持ち得た、魅了の術を彼女が造作もなく扱えたからだった。

…だから招いたが最後、彼らに出来るのはただ黙つて——意思が

あろうと無かろうと——その足下に額づくだけ。

そして、彼女が去るその時には殺されてしまう。

（しばらく此処で暮らしましょう）

——そんな華やかな生活をリーンは急に打ち切り、貴族からの贈り物を売り払って森にある手放された家でのんびり暮した事もあった。

ちなみに一度死んだ彼は生前以上の力を得てしまったので、狩りで困った事は無い。早々に数匹を仕留めて帰る頃にはよく彼女が洗濯を干している頃合いだったりする。

薪を割り終わった頃には彼女のどこか頼りない手つきの料理が出され、顔には出さなかったものの、豪華な食事よりもコースにはそれが美味しく感じられたものだった——ほんの少し。
…少しだけ、楽しかった。

(……………もう少しだけ、素直になれば……)

どうにもクースは素直な方ではない。しかも物事をどんどん良くない方に考えてしまう人間だった。

責任感が強すぎて、押しつぶされそうになった時もある。

ネガティブで甘え下手な彼は、リーンに何か言おうとしては黙りこみ、それを隠そうとして尖った物言いを吐き、ますます自己嫌悪と不安に陥った。

——そんな彼を、リーンは何度も宥めてあやしては一緒に居続けた。

……だって、記憶が無いが故に、ひどく寂しく心許無かったのだ。倒れ、灰に還るその時までを、誰かのぬくもりと一緒に生き続けたかった。

そんな二人にとって、この森での生活は『人間』であると思わせるほど優しくて穏やかな時だった。

……おままごとの時間と分かってても、二人はこの生活を繰り返し続けた。

けれども時は移ろい、また貴族の館に住ませてもらっていた頃、『魔女狩り』がその国で始まった。

クースが暇潰しに街を歩いていた時——まさにその時、広場で女性が磔にされて燃やされていたのだ。

野次を飛ばす声、怨嗟の声。ああ、それら全てがいに恐ろしかったか！

（もしこの声に囲まれて、自分たちの穏やかな時間も灰にされてしまったら……？）

嫌な予感を胸に、クースは急いで館に戻った。

そして館の女中がリーンに目を付け、教会に密告した頃にはもう、クースはきょとんとしたリーンの手を引き、あの始まりの夜のように馬を駆って隣の国へと逃げた。

逃げた先の国では、疫が蔓延っていた。

城下町でさえも閑散としていて、死体と襷褌を着た人間がそこらに転がっていた――あまりの惨状に、事前に目立たないよう、平凡な町娘の格好をさせていたリーンが薔薇のように華やかに思えるほどだった。

――どんよりした空の下、リーンと歳が近いだろう娘のやつれた姿を見て、クースは隠しきれぬ容姿に関しては諦めて、賊に合わぬよう細心の注意を払いながら次の国へと急いだ。

（ねえ、）

その道中、この死んだような国に対し「何だか真っ暗な国だね」というのがリーンの評価だった。

クースはこんな身の上になる前に、一度だけ滅びゆく国を見たことがあるが――リーンは無い。初めて見るその光景に戸惑っているようだった。

荒れた道の途中、馬を牽いていたクースは振り返っておろおろとしたリーンの視界を遮る。

ただ、黙って彼女のマントを目深に被せた。

（あと少しで国境だ）

もはや、人ではない二人は疫にはかからない。

——けれどもある日、あと少しで国を越える所で、リーンを腕に、馬を操っていたコースは倒れてしまった。

（どうしたの…？）

身体が熱く、熱病にかかったような苦しみに悶えるコースの手をとるリーンの手は雪のように冷たく、人だった時の癖で思わず擦ってしまふ。徐々に少しずつ、その手に温もりが生まれたのが嬉しかった。

小さな満足感を得たコースの手を取るリーンは、掠れた声で「ごめんね、」と囁く。

そしてぼたり、と。黄昏色の瞳から、あの日出会って以来今まで流したことも無い涙を、初めて流した。

クースの頬を濡らす、その滴――何百年ぶりの涙は、熱かった。

（…私のせいだ）

すぐに分かった。倒れた理由は簡単で、けれどリーンには解決が難しいものだと。

リーンはこの何百年、調節もせず（というか、しようにも、いくら勉強してもどうにも上手くいかなかった）その魔力を溢れだすままにしていたのだった。溢れる膨大な魔力はリーンだけではなく、クースにも必要以上に行き渡らせて。

――死人の彼をこの世に留めておくには、最低量でもただの人間と同程度の魔力が必要なのだ。

そして食わねば力が出ないように、食事を取らなければ魔力は湧かない。二人はそれを分かっていてここ数日何も口にできていない――
――というか、クースの過保護ゆえの想いから、何も食べていないだけだ。

どうしても、クースは自分が熱くとも吐きそうでも、例え彼女に害

はないと知っていても、そんな不浄な物が林檎色の唇に触れるのが許せなかった。その唇は綺麗な物だけに触れていてほしかった。

その唇は今、リーンにはよく分からぬ意地を張ったクースの手の甲に触れている。リーンが密かに好きだった温かい手は、血が出るほど強く握りしめられていた。

困り果て、ただぼろぼろと泣いているうちに、魔力はどうしても無意識か本能か――普通の人間よりは少し余る程度の魔力で、どうでもいい己の理性を保たせている。彼に回したくても、気持ちとは裏腹に彼への魔力がどんどん減っていく。

――ああ、もしも上手く魔力を操ることができたら……！そうすればこうなることも、彼が苦しむことも無かったのに！

しかしどんなに詰ったって、その才が全く無い奴が急に上達するわけがない。

…ならば、とリーンは人よりも良い耳を澄ませる。すると、そろそろと歩く獣の足音が聞こえた。

こんな獣、クースが本調子の時は絶対食べさせないだろう。そしてリーン自身も食べたくはない。同じ獣に成り下がるようで、リーンの僅かな矜持が許さない。けれど、我俣を言っている場合ではないのだ。

（このままでは彼が消えてしまう——私は……一人も冷たいのも、嫌よ。彼が灰になるのなら私も灰になりたい——）

愛というよりは、孤独に怯えるが故の決意かもしれない。

記憶をなくす前は分からないが、無くしてからはずっとクースが隣にいた。喧嘩をしたってすぐに帰ってきてくれた。自分を知らぬ恐怖に震えた夜は、黙って頭を撫でてくれた。

その全てを。隣で支えてくれる人も、慰める腕の無い夜を、もしも亡くしたら——どう生きていけばいい？

（……おい）

え、と低い声を掠れ掠れに出すクースを見つめる。

リーンの怯えと決意に染まった泣き顔を見上げ、クースは諦めのような、悟ってしまったような。泣きそうな笑みを作ろうとして、痛みで失敗した顔を晒した。

（親が死にそうながきみたいな顔しやがって）

——はっ、結局、お前も俺も『化け物』に成れ下がれねえなあ……)

(どうして、昔と変わらず、お前は……)

こつも俺を振り回すんだよ、と。

きよんとした顔を笑って、その唇に『食料』を突っ込む。甘くてしょっぱい味に、リーンは目を見開いて口から出そうとクースの手を掴む。

(なんだよ、そんなに俺は不味いつてか?)

引くまいとその腕に力を入れて、暴れるその身に片腕を回し——
——ああ、クースは何百年を経て、やっと『恋人』を抱きしめることができたのである。

*

記憶喪失ちゃんとそれを認めたくない不器用ちゃんのお話。

6・宝石箱と転落する御機嫌

目の前には女性の好みそうな華やかさとは逆の、流麗な――
悪く言えばさつぱりとした宝石箱。

二百年の月日を経ても、内包した宝物を守り続けている。

その中で溢れかえっているのは、春の花が咲き誇るカメオに輝きを失わない指輪、今まで髪を結う役を担ってきたリボン、じゃれるように筆談をして暇を潰した、質の悪い羊皮紙だけ。

――全部、全部が大切なものだ。その全てに優しい思い出があった。

懐かしい夢を見たクースは、少しインクの薄れた羊皮紙を破かぬよう、気を付けながら文字を拾った。

？ねえ、クーは何色が好きなの？？

？オレンジ？

？じゃあ、好きな空は？？

？夕暮れ？

？好きな食べ物は？？

？…シチューと、オムライス？

？今度、作ってあげるね？

——ここまで読んで、クースは恥ずかしさでベッドの上でゴロゴロゴロゴロ右へ左へと転がった。

そのせいで皺が寄る羊皮紙の上に浮かぶ我ながら達筆と思うほど綺麗な字と、リーンの丸っこい字。

昔、他の旅人と乗り合いの馬車に乗った時の物だ。

周りを起こさないようにこそこそ書いてはリーンは笑っていた。二枚目の羊皮紙がいっぱいになる頃にはもう、ペンを握ったまま彼女は眠ってしまった——それっきり筆談なんてしなかった。

？クーの故郷はどんな所？？

？織物が有名だったよ。商人もよく買いに来てたから、賑やかだったな？

？クーも織れるの？？

？んなワケねえだろ。俺は小さい頃から剣に齧りついて生きてきたんだよ？

そう書くと、小さく「まあ残念」と隣で笑う。何が残念なんだと思つたのも懐かしい。

ふ、と手から力が抜けて、クースはそれを丁寧に巻いて宝石箱の中へ丁寧に入れた。

なんだか今日は、ほんの少し…少しだけ、リーンに優しくできるような気がする。

宝箱の意匠をなぞりながら、クースは記憶の中のリーンにつられるように口元を緩ませた。

*

なんて思ってた30分前。

朝食をかつこんで、最近新しく買った剣を腰に差す。
最後に宝箱に目を向けてから、クースはリーンの部屋へ向かったのだった。

いつもの日課で眠っている間に部屋の薔薇を変えようと思ったのと、
リーンが言い付けをちゃんと守っているかの確認の為だ。

トントントン。

軽くノックをしてから、クースは「入るぞ」と断りを入れてから鍵
を差し込んで静かに扉を開ける。

暗い室内の奥、少し枯れてきた薔薇の目立つ花瓶と、その隣にある
高級なベッドに近づく。そろそろと近づき――

「――いない!？」

自分の叫びで花卉が何枚か散るのを横目に、こちらに背を向けた大
きなロッキングチェアへ大股で歩み寄ると……そこには何故かルー
シエットの飼い猫、ハイリンヒが丸くなって寝ていた。

「……おい」

低い呼びかけに、ハイリンヒはスッと目を開ける。

クースはハイリンヒの「あん？」と書かれた顔をわし掴んで扉の向
こうへぶん投げた。

(何処行きやがったあの馬鹿……!)

———「せつかくの「優しい気持ち云々」は物の見事に吹き飛んだ。

もしこれがロストであれば「あちゃー、」で済むが、いかんせん彼は穏やかな質では無い。何度リーンを叱りつけたことが。そして何度言い過ぎたと落ち込んだことが。

…唯一の救いは、この怒りもリーンの身体を心配してのものだという事を、心配をかけている張本人が知っている事だろうか。

とにかく怒りを鎮めようと、クースは目を固く瞑って深呼吸を始める。

そして、神経を研ぎ澄まして自分に（滅茶苦茶な）魔力を与える彼女を探した。

リーンとクースの契約上、探ろうとすれば相手の居場所が分かる———のだが、リーンは何分魔法についてベテランという訳でも才がある訳でもない。

そのせいで欠陥が出来たのか、二人を繋ぐ魔力経路が無茶苦茶なせないのか———お互い、この探索の能力は非常にぼんやりとしたものであった。

クースは少しずつ見えてきた霞みがかった景色に、更に集中を高める。

——仲良く鳴く小鳥、ひっそりと並ぶ木々、獣道になりかけた一本道。

森か、とクースは手をぎゅっと握った。

通常なら景色を見るでもなく、一発で「××の×××にいる」といった感じで直感的に分かるらしい。

けれどこの不完全な繋がりでは、リーンの瞳を通して見る風景だけで今どこら辺にいるのかを推測しなければならない——
クースは、リーンが出歩く時はきよろきよろと周りの風景を楽しむ癖があつて良かったと、この時だけは思ふのだった。

(…ん?)

不意に、リーンが後ろを振り向く。その際に見えた小さな門は——
——東か。真新しい東屋の向こうにある門が、リーンの視界に映った。

「……………」

クースは瞳をそっと開けて踵を返す。
扉を閉め、顔面を強打した猫を無視して東を目指した——

「おはよう、駄犬さん」

「——ッ、クースだ！このクソガキ！」

自分の服の襟を日傘の持ち手部分で掴んだ魔女に怒鳴りつける。その際に傘も手で弾いた。

「…何か用か」

振り返り、犬猿の仲である気に食わないこの城の主を睨みつける。彼女は昨夜の気品のある服装ではなく、可愛らしいデザインのドレスを着た貴族令嬢のような佇まいだった。

そんな敵意丸出しのクースの瞳を、ルーシエットは冷たく蔑むような目で見据えた。

「御客人の荷物から、あの女の手先——使い魔が潜んでいたですよ。賊の退治は貴方のお仕事でしょう？…怠けてんじゃないわよ」

ルーシエットは日傘を持ちかえるとクースの喉元に向ける。

風を切って向けられたその先は、尖っていない筈なのにとてもし鋭利な物に思えた。

「……チッ。やりやあいいんだろ…リーンを見つけたら掃除してやるよ」

「探しながらおやりなさいよ。羽虫が私の城をうろつくなんて耐えられないくらい私は繊細なのよ？神経のド太い貴方と違ってね」

「じゃあ、お前がやりやあいいだろ。その方が早いし」

「数少ない貴方の仕事でしょう？せいぜい剣を振り回すくらいしか脳の無い、野蛮な貴方と高貴な私の間で取り交わした契約に反するというのなら――…一回、痛い目をみなきやいけないようね」

ふふ、と嗜虐の笑みでルーシエットは傘を先でクースの顎先を乗せた。

契約――あれから、クースの我儘と諸事情で食事制限をする事になったリーンの、当然ながら減るその魔力の分をルーシエットが補っている。

だからもしルーシエットが魔力を切れば、クースは少ない魔力に悶え苦しむ事になる。

――だが、いつも陰悪な仲であるのに、今までそれをルーシエットはしたことがない。

すれば彼女の親友であるリーンが悲しみ、下手をすればこの城を出て、無理にでも足りない魔力を集めることになってしまいかもしれないからだ、こうしてリーンのいない、預かり知らぬ時にはルーシエットはこの言葉でクースをいびる。

それは絶えぬ口喧嘩の時であったり、クースが言う事を聞かない時にだけ使われる。

—— 結局、どんなに嫌いであっても、クースはこの城の平和を外からも中からも守る為には必要な人間だからかもしれない。

しかし彼女は魔法の才あふれる人間であるから、支障の無い程度には痛めつけてくるかもしれないので、クースは大抵その言葉で折れる。

そして今回も、大変癪だがこちら辺で黙って従う事にした。

こんなくだらない事でルーシエットの目の前で苦痛を晒して嘲笑われるのも、リーンに心配をかけるのも嫌だった。

「……やりやあいいんだろ」

「ええ。——でも数が多いから、被害が大きくなりそうなら助けてあげるわ、」

ふふふ、と口元に手を当て珍しい事を言うルーシエットに、クースは驚くよりも気味が悪かった。

さつさとクースが折れたからか、客人ことロストが居るが故の機嫌の良さからくる発言かもしれないが、彼女が急に振った優しさに、不器用で素直でないクースはどう捌けばいいのかわからない。

ルーシエットは先程の冷たさと拒絶の雰囲気を消し去って、年相応

の柔らかい雰囲気振り撒き、スツと傘を下げた。

「な、なんだよ。お前も結構可愛いとこあんじゃないか……」

「あら、私はリーンと騎士様を、と続けたかったのだけど……助け
てほしかったの?」

「……………っだろうと思ったよ!」

クースは吐き捨てるように叫ぶと、雰囲気を变えてまで騙したルー
シエットに背を向ける。

—— ああ、くそっ照れと恥ずかしさで、きつと顔が赤い。

冷笑と「馬車馬のように働きなさいよ」の言葉に、クースは「うる
せえっ」と怒鳴ってリーンの後を追った。

*

（貴方は嫌いだけど飽きないわ、と小さく笑うのが聞こえた）

7・共闘戦線

『客人』こと騎士ロストは、目の前で剣をブンブン振る不審者——
——いや、リーンの従者、クースの姿を見て急いで追いかけて来た自分に後悔した。

疲れたのか不満が爆発したのか……はたまた憑かれたのか、ロストにはさっぱり分らないが、とにかくにもクースは刃を陽の光で煌めかせながら外廊の真ん中で剣舞のような体裁きで——暴れていた。

身のこなしは美しいのだが、その口から出る悪態やら途中で出る足癖の悪さのせいでどうにも残念な剣舞であった。

「ああもつめんどくせえ！あの野郎くたばれ！死ね！とにかく死ね！」

きつと『あの野郎』って俺の事だよなあ……と怒る前に泣きそうなロストは、静かに踵を返し——

「動くな！」

——頬すれすれ、髪を少し斬って、ナイフがロストの左頬の隣目掛けて飛んできた。

思わず短い悲鳴をあげたロストは更に悲鳴をあげた——…何と
いうか、気持ち悪い生き物の頭に見事、ナイフが刺さっている。

ぶちゅぶちゅ、と黒い血が吹き出るそれが頬にかかった瞬間、見た
くないものが見えてしまった彼は、振り返ってナイフを投げた張本
人に抱きついた。

「——で、めえ……！」

華奢そうに見えて案外しつかりとした腰に必死に抱きついたロスト
は、クースの地を這うような声が上から聞こえても抱きついて離さ
なかった。

「ね、ねねねねねねえ！あ、あれっ何！？」

「…てめえの、荷物から湧いて出た、使い魔だあ！！」

言い切る前に、クースはロストの腹に膝を叩き込む。

構える間もないそれに尻餅を吐くと、ロストは咳こみながら周りを
見渡す。

不浄の血によって魔の使いが見え始めたロストの視界には、今や美
しい外廊の、薔薇が風に舞い上がる幻想的な世界が崩れた。

「う、あ……！」

——広がるのは黒い血が広がり、カラカラと笑う使い魔の群
れが自分たちを包囲する恐ろしく汚らしい世界。

手を取り合って陽気に踊ったり、一人でくるくる回る回り続ける使い魔の姿は皆等しく、顔は塗りつぶされた黒、ぬらぬらと動く手足、腹周りには異様に綺麗な目がある。

頭と同じく黒い角に耳なのか羽なのか分からない、黒く霧がかつたそれらはまるで、悪魔に見えた。

最後にクースの姿を見直すと、彼も所々汚れている。抱きついた自分にも付着した黒い血からは嫌な臭いがする。

「つ、使い魔って、何で？何で俺の荷物から!？」

「敵情視察かなんかだろ。クソガキの命令で今大掃除中だ。分かったら失せろ」

「いやいやいや！陛下はそんなことしないっ」

「じゃあ后の方じゃねーの？おら、頭伏せてろ!」

横に斬り捨てると、また嫌な音と匂いが漂ってきた。

「お、俺の荷物、にまだ、いるの？」

「いや、ボス級の使い魔は逃げたな。こいつらはそんな強くねーけど、すぐ繁殖するわ気配が無いわで面倒なんだよっ。背後から襲ってきたり、なっ」

黒く塗りつぶされた顔に肘鉄を喰らわすと、クースはロストの襟を引っ掴んで立たせた。

「剣を抜け」とだけ言うと、彼は転がっていた使い魔の首を落とす。

「俺でも倒せるの……?」

いや、正しく言うくとコースもだ。使い魔は外廊を壊して、獅子のよ
うに戦っていたコースの足場を奪いにかかったのだ。

コースは足下の床を蹴り、ロストと同じく薔薇園のその咲き誇る中
に突っ込む――前に、近くに居た使い魔二匹を下敷きにし、
ロストを片手で引っ掴む。

薔薇の棘で使い魔はズタボロになったが、二人の被害はせいぜいロ
ストの靴が少し痛んだくらいだ。

コースはポイツとロストを投げ捨て、小さく舌打ちをした。

「……遠回りじゃねえかよ」

「え？」

「何でもない」

ツンと返して、コースは剣に着いた汚れを振り下ろす。

ロストは近づいてくる群れを認めて、一回だけ深呼吸をして細剣を
構えた。

頭痛は今も少しするが、問題無い。

「右、お前がやれよ！」

「分かったっ」

勢いよく頷いたものの、此方の方が数が多い気がする。思わず不平
を言う前に、コースは駆け出した。

ロストはぶよぶよと伸ばされた手足を斬り落とし、達磨のようにな

った使い魔を二つに裂く。

対するクースも同じく達磨のようにしていたが、彼は達磨になった彼らを踏み潰し、薔薇の茨に押し込み、はたまた盾にしたりと惨い戦い方だった。

使い魔にも心があるのか、それとも彼を危険と認識したのか、ロストが相手にしていた使い魔はクースの方へと数で攻める。

彼の白い頬に赤い線が入った瞬間、ロストは上着に隠し持っていた水——城を出る前に同僚から貰った聖水を、群れて黒くなりつつある宙に投げ、小さなナイフで容器を割る。

——パリン、と飛び散る聖水に、じゅわじゅわと使い魔は解け始めた。聖水が手に二三滴かかったクースは「馬鹿野郎、やるならやるって言え！」と命の危険を感じて叫ぶ。

「い、ごめん……」

「まったく……怖い奴だよお前は！」

怖いのはクースの方だと思っ……と内心想いつつ、もう一度謝った。

「あと残り半分くらいか…」

「これで!？」

使い魔の消えかけた身体を蹴飛ばして、コースは独り言のように呟いた。

「急がないと倍になる。……お前、もう帰ってもいいぞ」

「いや、俺の荷物から沸いたんだし…俺も手伝う」

「はっ、急に意気込んでどうしたよ？さっきまで情けなくベソかいてたくせに」

「…心構えさえできれば、大丈夫なんだ」

最初こそ良く分からない現状に、世界に戸惑って否定したくてヘタレ全開だったが、認めてしまえば大丈夫。こんな危険極まりないのは早く退治するに限る。……急がなければ。

(……あれ?)

急に沸いた戦意に、ふと疑問が浮かぶ。

頭痛はまた酷くなってきたような気もするし——ロストが首を傾げていると、コースは急に走り出した。

「ちょ、まっ、待って!」

「……………リーンの所に急がないと…」

追いかけるロストを無視して、クースは更にスピードを上げる。

腕にかかった聖水のせいで焼けた肌が風に触れる。痛みで顔を顰めつつ、クースはさっさと東の庭園に最短で行く為に、柵を乗り越え門扉を蹴飛ばし花を散らして東屋の向こうにある、森に繋がる門を目指す。

ロストがその人間離れた身体能力に感心した声を出す、クースからしたら「お前もだいぶ人間離れしてるわ」と眉根を寄せた。

―― 頬は赤く染まっているが息はさほど乱れていない。最初は躊躇していたものの、今では同じように柵を乗り越え花を散らすのは心が痛むので遠回りして……それでもクースから少し離れた距離を保っている。

「……………チッ、もうかよ」
「え？」

クースの舌打ちに見上げると、彼は左を睨む。

同じくロストも左を見つめれば―― 使い魔の群れ、が。

ききききき、ぴぴぴぴ、びぎぎききききぎぎ。

耳に触るその声に、ロストは眉を顰める。目の前でクースが剣を抜こうとしたのが見えて、彼が静かに声を上げた。

「俺が相手をするよ」

「……正気か？」

「だってリンちゃんに何かあったら大変だろう？大丈夫、聖水も
う一本あるし」

「——じゃあ、そうさせてもらう」

少し解れかけた髪を風に靡かせて、コースは何とも言えない微妙な
顔で口を開いた。

「……いいか、ボス級を倒せばもう奴らは繁殖できない。クソガキ
の結界に干渉も出来なくなるから、しばらくしたら勝手に消える」

「その、ボスって、どんな…？」

「簡単だ。デカイし周囲の使い魔が守ろうとするからすぐに分かる」

せいぜい死なないように気を付けたな、と吐き捨てて、コースは
背を向けて先程よりもスピードを上げて東の庭園の門を目指した。

（…………よし、）

何匹かコースに付いて行ってしまったが、残りの群れは全員ロスト
を見つめて微動だにしない。

ロストはギリギリする心臓のあたりに触れてから、剣を抜いた。

「——あら？あんな所で何をしているのかしら？」

魔女は、日傘を差して高い塔の上、風に煽られながらある一点を見つめた。

愛らしい唇は薄く笑んで、白く小さな手は日傘の持ち手をきゅ、と握る。ばたばたと風に遊ばれる、魔女らしかぬ令嬢のような可愛らしいドレスの裾を握って……落ちた。

*

（激しい彼と、穏やかな彼と）

8・魔女によって幕は降りる

彼女は色んな事が分かりません。

その身の美しさに彼女を屋敷に誘い、高価な物を捧げる貴族が、まったく興味を持たない自分に向ける感情も。

春の命が芽吹く事の喜びも、夏の喧騒も、秋の物寂しさも、冬の感傷も——彼が時折零す、それが。

…昔、黄昏が好きだと言ったくせに、本当は青空が好きで彼の言葉の裏も。時折見せる優しさも、悲しさも、やっぱり分からないのです。

——いえ、本当は分かっていたのです。

けれど、それを掴む寸前、彼女は『病』によってその繊細で尊い××を、失くしてしまったのです。

僅かに残った××は、彼が苦しげな顔をするのも、傷ついた顔をするのも見ると、何だか息苦しいものを彼女に与えます。

……ほんの少しの××がそうさせるのかもしれませんが。

病にも彼にも困り果てたある日、何となく。そう何となく微笑んだ

ら、彼はとても嬉しそうで——息苦しさも無くなったものですから、それ以来彼女は常に微笑んでいます。そうしていると、段々と嬉しいのか嬉しくないのか分からなくなりましたが、彼女は気にしてません。

大事なのは苦しいか苦しくないか、なのですから。

「く——来るなっ来るなあああ!!」

そんな彼女でも、こうも激しく拒絶されると少しは傷つきます。彼女は自分の為なのか侵入者の為なのか、よく分からないけれど、とにかく苦しさから逃げる為の微笑みを浮かべました。

侵入者からするとそれは艶やかで、しなやかな牙が見え隠れする微笑みで——食事を始める前の、獣に思えました。

「……あ、」

ナイフをぶんぶん振り回すその腕は簡単に掴まれます。

彼女は侵入者は罰するよう言われているので、あまり気の進まないのですが——しょうがないのでその腕を振り下ろしました。

微笑む彼女の目の前で、男は痛い、痛くてしょうがないと身を振ります。

彼女はふと近くに転がっていた自分の籠を拾うと、中身の被害が最

小である事に安堵しました。

苦勞（といっても人間からしたら苦勞所の話ではありませんが）して摘んだ分、また出直しなんて嫌ですからね。

きききききききき、きききききききききききき。

「……？」

きよとん、と首を傾げると、目の前の男を庇うように――黒い使い魔が現れた瞬間、ぼんやりしている彼女を囲みました。

何だか彼らは賑やかで、楽しそうに踊っていたり回っていたりと騒いでいます。

――…彼女は、誘われるように足を踏み出しました。

*

一方で、ロストは薔薇の中へと身体を埋めた。

迷わず頭と目を庇った結果、彼の腕や上半身は酷い有様——でも、それよりも遙かに頭の痛みが勝った。

怪我をした訳でも持病持ちでもないのに頭が痛い……何故か、この異様な魔に向かって剣を振るえば振るうほど、彼らしかぬ考えが頭を占めては余計に痛みが増してゆく。

——剣を握るな、何もせずに部屋に逃げると怒鳴る声と、急げ、急いで倒して……急げ、と静かに、しかしはつきりと告げる声が両端から聞こえて……さっきから思考回路が滅茶苦茶だ。

(……どうすれば、いいんだろう……)

薔薇のせい、か血のせい、彼の世界は嫌と言うほど赤い。

「……いつ……」

彼は何とか痛む身を起こし、その目に青い空を映したかった。……にやにやとこちらを見る使い魔ではなく、青空を。

戦闘中に何してんだお前、と教官に殴られそうだが、この赤い世界から逃げ出したら頭の痛みが消えるような気がして——消え、

「——け、剣が無い!？」

何となく傍に転がっていた剣を握り締めようとしたら、それは一瞬で姿を消した。

(なんで……！？)

彼が一瞬真っ白になってしまつたのを見た使い魔が、指を差してゲラゲラ笑う。

かちん、かちんと聞き慣れた音にロストが勢いよく見上げれば、足の無い使い魔が剣を鞘から抜いては戻しを繰り返していた。

「か……返せ！」

彼は胸の中で奇跡的に無事だった聖水を投げる。
だがそれは彼の剣によって弾かれ、蓋の開いていたそれは無様にも彼にかかった。

ききききききききききききききききッ

使い魔は嗤って、激しく彼の剣を振り回したり音を鳴らしたりと気ままに遊ぶ。

ロストは身の危険と自分の剣を玩具にされた怒りに駆られるように、なんとか立ち上がってナイフを投げて仕留めんと——して、地面に激しくキスをした。

「……っ、」

見れば、薔薇の陰に隠れた使い魔がロストの足に手を伸ばしている。絡めた足からするりとその腕を外すと、再度立ち上がろうとした口

ストの背へと叩き込んだ。

「——ッ!」

その衝撃に胃の中の物を戻し、口も切れた彼はあまりの衝撃に動く事が出来ない。

惨めさに唇を噛み、次に来るだろう痛みに彼は目を逸らさずに使い魔を睨んだ。それを嘲笑うかのような声を上げると、使い魔は彼の背に、もう一度、

「……ほら、今日のご飯を上げるわ——ハイリンヒ、」

赤い世界に似合わぬ可憐な声。

「お行きなさい」と笑うような声が響くと、ロストが睨みつけた使い魔は「ハイリンヒ」と呼ばれた黒猫の小さな腕で頭を飛ばされた。

きき、ぎ、きぎゅ

それでも動くそれに、ハイリンヒは使い魔の目を食い破り、吐き捨ててはさらに食い破る——ロストはその視界の暴力に、もう一度吐きそうになった。

「……あの駄犬ったら、本当に何をさせても駄目ね!一つの事にしか集中できないってどういう事よ」

上から聞こえた声に、ロストはそろそろ顔を上げた。

——彼女が纏うのはこの世界に浮くほどに可憐なドレス。優雅に日傘を差し、小さな足が納まる靴には汚れ一つない。

「……ルーシエ、ツト……？」

「そうよ、騎士様？…流石に客人を捨てる直前の雑巾にする訳にはいかないから、助けに来たわ」

「……雑巾……」

確かに吐瀉物の上に顔を突っ込んだ自分は雑巾みたいなもんだろうと、ボロボロの身体を思いながら、ただ彼女を見上げた。

彼女は涼しげな顔で使い魔の群れに目を向けると、白く細い指を唇に当てた。

「——この、私の庭で好き放題吐き放題してくれたお礼はたっぷりとさせていただきましよう？…喜ばない、派手に過激に！最期を飾ってあげる」

ねえ、避けられるなら避けてもいいわよ。…出来るなら！——
そう叫んだ次の瞬間、ロストの世界は白く塗り替えられた。

それは本当に美しい純白。純白の林を紫の熾紛が吹き抜ける様は、目に焼き付くほど忘れがたい幻想的な光景だ。

その純白の林——否。無数の、百に届くかもしれぬ白い剣、白い槍の下、頭に腕に胴体に、まるで赤を奪い合うように刺さっている。

その中で死に至れなかった者は、何とか抜け出そうと身を擦っては血を吐いた。

まるで針鼠のように彼らは優美な剣と槍で縫い止められていて、そのせいか、身を擦る際に血が流れようが噴こうが——やっぱり、溢れる赤は白の数に負けてしまっている。

「あらいけない、死者は葬らなければいけないのだわ。…でも土葬は庭園の邪魔だし……ああ、火葬なら丁度いいわね！」

わざとらしくそう言い切ると、白い剣と槍は炎に解ける。

それらが刺さった分だけ火力が強いらしく、奇跡的に数本で済んだり一本で済んだ使い魔は翔るような火に、狂ったように跳ねたりと激しく踊り始めた。

踊る炎と悲鳴は天にも届かんと先をちらちらと揺らめかせ、ロストの肌に熱気を当てる。

その傍でルーシェットは見上げながら「…何だか過激さが足りないわ」と呟いて、彼女は空から雨を降らせた。……いや、雨では無い。

[illegible]

焼き損ねた彼らは降り注ぐ雨にのた打ち回った。

炎を下火にしたそれは――聖水である。彼女は神聖魔法を使つたのだ。

「無様ね」

ルーシエットは薄く微笑んでいる。

それは見ていて何故だか悲しくなる笑みで、見てられなくてロストは顔を下げた。…その視界の先で、彼女の汚れ一つない靴に灰が乗るのが見える。

対するルーシエツトはいまいち気が納まらないのか、眉根を寄せたままだ。

「…うーん、何だか煩くなっただけね。過激…過激…何かリクエス
トでもあつて？」

「…もう、いい…ッ！」

「欲の無い騎士様、無理に動かない方が良いわよ——？」

その言葉を無視して、ロストは痛む身に鞭を打って何とかルーシエットの白い手を握った。

当然血に汚れてしまうのに心を痛めながら、ロストは切れた唇に顔を顰めつつ、口を開く。

「——もう、いいんだ。君のおかげで、俺の気はもう済んだよ。……俺の代わりに倒して、くれて、あり……痛ッ……ありがとう——それと。……もう、君がそんな顔するの、見てられないから、」

次は、そんな顔させないように強くなるよ。……そんな顔させて、ごめんね。

彼女は紫の美しい瞳を見開く。
そして目を伏せ——溜息を吐いた。聖水の雨で止めを刺された彼らを一瞥してから、小さく頷き……そっぽ向いて口を尖らせた。

「……そう言う事は、貴方の仕えるお姫様に言いなさい。魔女^{わたし}に言ってもしょうがないでしょう？」

「関係ないよ。騎士は、弱い誰かを守る為にいるんだから」

「——私は、弱くない」

「あー……っと、騎士は強い女の子も守るんだよ！」

「後付けでしょう、それ……」

ハン、と鼻で笑うルーシェットに困ったように頬を掻けば、指にベチャリと血が付いた。

「違うつて——……なんていうのかな、俺は君の笑った顔の方が好きだよ」

あの、初めて出会った時に浮かべた、微笑みが。…忘れられないほど。……とは流石に言えなかった。

照れ隠しのように袖で顔を拭いていると、ルーシエットはその手を止める。

花が刺繍されたハンカチを取り出すと、そっと顔を拭いてくれた。……何故か膨れっ面であるが。

（怒ってる顔も可愛いなあ……）

女心は難しいと思う反面、しかめっ面なのに優しく汚れをふき取る彼女に和む。

この城に来て一日経ったくらいの仲だが、ルーシエットが噂ほど、クースの言うほど冷酷ではなくて——思いやりある優しい子であると、知った。……というか、感じた。

——そんな優しい指先は、何だかくすぐったくて声を殺して笑ってしまう。

拭うのに夢中で気付かない彼女は血も汚れも気にせず膝を着き、溜息を吐いて首元も拭った。

あらかた拭き終ると、腕を掴んで小声で何かを囁き——微温湯に浸けたような感覚が腕に走れば、段々と痛みが腕から引いていった。

(…何でもできるんだなあ…)

きらきらと零れる銀と紫の熾紛が溶けていく様に目を奪われていると、ルーシエットは役目を終えたハンカチを放り投げた。

「あ——」

はらり、と地に落ちる寸前、思わずそれを掴みとる。

元は白かったそれを握り締めるロストに、ルーシエットは訝しげに彼を見つめた。

「これ、洗って返すね」

「……別に、ハンカチには困って無いのだけど」

「いや、でも、…何か罪悪感が」

「気にしないで。さっさとその汚いの捨て——ちょっと!」

「……俺が、嫌なんだ」

きつぱりとそう言えば、ルーシエットはぼかんとした顔から——
—何故か泣きそうな顔に変わる。

まさか、そんな反応をされると思わなかったロストがぎょつとした隙に、ルーシエットは彼の胸に飛び込んだ。

(——…え!?)

思わず押しのけようとして——べちゃりと汚れた手を見て止め

る。

きゆう、と胸元を握る彼女にどうしたものかと困り果てた彼は、恐る恐る、彼女の名を呼んだ。

「ルーシエット……？」

「……」

聞き取れぬほどの声音で彼女は何かを囁き……一度目を伏せるや、儚さの余韻を残さず、鋭くキツと睨みつける。

——だが、睨みつけた先はロストでは無い。

彼女は日傘を掴んで空に投げると、日傘は白い勇壮な槍となって貫いた——…姿を隠していた、使い魔を。

「なっ………！」

ロストの目には何も見えない所から黒い血がゴポゴポと溢れ、槍が落ちると同時にそれは姿を見せた。

「にゃー」

「…許可するわ」

そして、他のよりも明らかに大きいそれは墜落するやいなや、今までそこらの屍を貪っていたハイリンヒによって主の許可の下、ずるずると引き摺られる。

き……きい……き……

掠れた声で鳴く——いや、泣くそれは、槍が刺さったままハイリンヒに飛ばれ、薔薇の陰に連れ込まれる。

また助けてもらったな、と申し訳ない気持ちでルーシエツトを盗み見るも、彼女の艶やかな黒髪がその横顔を隠している。

綺麗な髪だと、思わずじろじろとその髪を眺めれば、彼女の唇がきゅ、と強く噛むのが見えた。

「ルシエ…？」

ロストが名を呼ぶと、その綺麗な髪はふわりと揺れる。

薔薇の向こうを見つめ続ける彼女の、黒髪の合間から見えるその頬は——赤かった。

——もしかして、彼女は……泣きそうな顔を見られ、何故か抱き付いた事が、今になって恥ずかしいのか……？

（なんていうか…追い詰めるみたいで、今言わない方がいいのかもしれないけど…）

でも、今言わないと、言う機会どころかその時の話をするなどか言われそうな気がする。——ロストは、爽やかな微笑みで彼女に囁いた。

「また助けてくれて、ありがとう……ルーシエツト」

……。

……。

………彼女は無言である。ただ黙って俯き、彼女の黒髪しか見えない。

ぷるぷると微かに震えているのが分かって、ロストが思わず吹きだした瞬間——彼の意識は暗闇に落ちた。

*

「……あれ、あれ………？」

ルーシエツトが照れ隠しにロストの意識を沈めた頃、リーンは男を片手で引き摺るのを止めて、きよろきよろと周囲を見渡した——
——そう、迷子になっていた。

リーンは旅をしていた時はクースの後に着いていたり、彼女が先頭切って歩いていても帰る時は彼がその手を引いてくれていたせい、「帰り方」というものが……いや、そもそも「帰る」ことを念頭に動かないせいで、毎回毎回こうなってしまう。

……ちなみに、リーンはその事に反省したりとか学習しようだとか考える事はない。クースが何百年も甘やかした結果である。

「……………」

引き摺られていた男が痛みに呻く声を聞いて、リーンは善意で、そう「善意」で、彼を寝かせて休ませてあげたいと思った。…勿論、「永遠の」とかの方では無い。

——もう一度見渡せば、ちょうど近くに寝かせるのに丁度いい木がある。

そこに行くには草の根を分けていかねばならない。

抱き上げて行けば一番いいのだろうが——彼女は昔、倒れたクースを抱き上げようとして怒られた事がある。

矜持がどうやらなんやら言う彼の言を纏めると「男を抱き上げてはならない」で、これを守らないとパーンってなるからと彼は言ったが……羞恥心と情けなさで思わずパーンとなるのは彼だけである。

……とにかくにも、彼女がほとんど言ってる意味が分かっているのを理解したクースが短く言い包めたそれを、とりあえず彼女は

守った。…つまり、そのまま引き摺ったのである。

「いゝ…あづ、…だっ！」

男の身体に木の根やら石やらがぶつかり、所々で草で身を切るが、彼女は構わず男を引っ張る。

見てて痛そうだし可哀想とは思っただが、彼女の中で優先すべきはクースだ。

哀れな男が息も絶え絶えになる頃には、やっと目当ての木に辿り着く。

流石にこればかりは労わるように優しく太い木の根に頭を乗せようとして——男は60?程の高さから落下した。

……力の加減が分からなかったリーンが、力を緩め過ぎたせいだ。

「あっ」

グラスを手落としてしまった時の声を出したリーンは、意識を無くした男を見ておろおろと手を揉む。

呼吸しているか確認するべきなのだが、彼女はクースに「綺麗な物しか触るな」と言われているので、男の血と泥に汚れた首元に触れるのは躊躇われた。

「……そうだ、」

少しだけ困った彼女だが、籠から覗く水筒に目をつけると、汚れを落とそうと蓋を開けた。

そして彼女はそれを少し傾けるのではなく、真つ逆さまにして、まるで滝のように中の水を注いだ——男の首は圧迫され、身じろいだ際に鼻と口に当たってぐぐもった悲鳴と懇願の声を上げる。

これも勿論、リーンは「善意」でもつての行動であつてそこに悪意はない。繰り返す、彼女に悪意はない——ただ常識やら何やらが抜けているだけである。

なので、リーンからしたらその悲鳴は息を吹き返したものののだと認識されている。

彼女は見事、介抱出来た事に満足して鼻歌交じりに男の隣に腰かけた。近くに白詰草が咲いてるのに気付いて、意識はすでに男から花だけになる。

「——ッ、リーン！」

あともう少して花輪が出来るというところで、髪が解れ、黒く汚れたクースが獣道から飛び出した。

対するリーンは、自分が気付かぬうちにパアッと顔を綻ばせてクースを見上げた。

まるで母親が迎えに来たと喜ぶ子供のような顔に、クースは一瞬苛

立ちやら何やらが消えかけたが———なんとか気を取り直して「何で言い付けを守らなかった！」と怒鳴る。

「それに何だその男は！知らない男に付いていくなんて何度言ったら分かるんだ！！」

「付いていつてないですよ？私が引き摺りましたもの」

「引き摺……引き摺った？」

そう言う問題じゃないだろ、と言うのも忘れて彼はボロボロの男の顔を覗き込んだ。

男は所々打撲やら血やら服が切れてるわで散々な姿である。

正直リーンしかちゃんと見ていなかった彼は、詳しく事の次第を聞き——責めるべきかどうか悩んだ。

——だって、この男こそは使い魔達の主で、彼女の行為は自衛であり、この城を守る身としては間違った事はしていない。

……が、やり過ぎだ。しかも恐ろしい事に、彼女はこの責め苦を介抱と捉えているのだ。

思わず頭を抱えたクースに対し、彼女は「介護出来たの！褒めて褒めて——」と言わんばかりの態度である。

彼は深く溜息を吐くと彼女の頭を撫でた———ああもう、この無邪気な笑みとは何て素晴らしい免罪符なのだろうか。

———はいはい、悪いのは自分の説明不足でお前の要領が悪かった事だけだとも。ああ、お前は悪くないとも。

この男についてだって、偵察をする分にはこういった状況に陥る事も考えていただろう。それが現実になっただけだ。

「……とにかく、生きてるんだな？」

「だってさつき水をかけたら返事しましたよ？」

「……返事？」

「ごぼごぼ言ってたのです」

それ水に咽てんだよ。何で水責めしてんの？……と思ったが、クースは黙って男の首元を緩めて脈を確認した——拷問のような事をされても、男は何とか生きていた。

「あとお花。クーには白い花が似合うと思って——」

「……ああ、俺にか。てつきり手向けの花かと思った……」

編みかけの花輪を見せるリーンの手をとると、クースはさつさと帰る為にその花輪を結ぶ。

綺麗な王冠に彼女が目を丸くすると、彼はポテ、と王冠を頭の上に乗つけてやり、優しい色合いの金髪の上で慎ましくも主張するそれを撫でた。

「——おら、帰んぞ。……説教は暖炉の前でだ」

「……暖炉？」

「身体、汚れてんだろ？。風呂入って髪を乾かしながら説教だ。

……これなら逃げらんないだろ」

「……………ずっと、思ってたんですけど…クーは、綺麗好き？」
「あ？……………ああ」

曖昧に頷くと、クースは男を脇に担いでリーンに手を差し出す。

リーンがいつも通りその手をとると、二人はのんびり城に戻った――
――後、クースはルーシェットに紅茶を投げられて一騒動を起こし……………結果、リーンは彼から説教されなかった。

*

（このッ役立たずのッ駄犬が！騎士様が死にかけたのよ！？何やってたのよ！ああもう、このッ穀潰し！！）

（ああ！？あいつが「手伝う」つつたんだよ！てめーの責任だろうが――てか、あいつが寝込んでるのはお前のせいだろ！）

（何ですってえ！？）

（…見て見てハイリンヒ。クーに作ってもらったの）
（にゃー）

9・あなたの為に

「クー！見てくださいな、木苺のタルト！」

「お前…記憶ないくせに、料理の腕だけは一丁前だよな」

厨房にて、包丁を片手で弄ぶリーンの目の前には美味しそうなタルトが一つ。

材料には昨日採ったラズベリー（採るまでの行程が危険な所に生っている）と元々あった真つ赤な苺。そしてその下には、クリームチーズの海が眠っている。

暇なうちにと作ったチョコ味のマドレーヌを皿に盛り付けた後、彼女はハーブティーを淹れた。

「あ……とと、」

「……………」

危なっかしげに茶を淹れるリーンには見えなかったが、コースは警戒心の解けかかった子猫のようにそわそわわくわくとタルトを見つめている。

ああ、見れば見るほど美味しそう——彼は、甘い物が大好きなのだ。

——だが、彼はその事を人に言わない。

「男が甘い物を好くな。この軟弱者め」と父に幼い頃から言われ続

けて成長した事と、ただでさえ中性的な容姿であるのに女のように甘味ではしゃぐのは彼のプライドが邪魔したからだ。……まあ、目の前に出されると瞳が喜色に滲むので、そこでバレルのだが。

そんなクースの性格と好物を、この何百年の間———というか旅をして十何年目で彼女は気付いた。

元々料理の才があつた彼女は、貴族の館に住む度に使用人から色んなお菓子の作り方を習っては暇な時に作る。

普通に美味しいそれは、自分だけに作ってもらつたと思うと———それ以上に、とても美味に思えて、クースは時折口元を緩める。

リーンは、その瞬間を見るのが好きだった。

（あー… 宝石みたい…）

きらきらと輝いて見える、何だか可愛いらしいその姿を愛でるのも、彼は好きだ。

甘酸っぱい匂いを胸一杯に吸って、「幸せ」を噛みしめていると———無粋な包丁が、タルトを遠慮なく裂いた。

「……………」

裂いた本人は美しい食べ物に感動するとか、そういう繊細なものは持っていない。

ただ上手に美味しく作れたことに（クースが喜ぶだろうから）喜び、

とりあえず作ったから口に突っ込む。で、上手いとか不味いとか彼女なりに考えるだけだ。そこに美醜の問題は無い。

「切った！」

「ああうん…お前って切り分けるの下手くそだな…」

危なっかしく皿に切り分けたタルト。……見ていて何だか残念な気持ちになる。

（しょうがない、今度切り分け方を教えよう——…あれ、二百年前もその前も同じことを思ってたような…）

——ともあれ、彼は残念な気持ちと結局甘やかしてしまう自分に呆れながら、タルトを口の中に放り込んだ。

甘酸っぱさと爽やかなクリームチーズが彼の口の中で踊り、やがて溶けて消えていく。頬を薄らと染めたクースは目を細めた。

病み上がりで不機嫌なクースの為に、美味しい頃合いだろう木苺を言い付けを破って摘みに行ったというリーンは、犬だったら尻尾をバタつかせただろう彼の態度に満足気だ。

彼女もまたタルトにフォークを突き刺すと、そのまま淡々と放り込み——ふと、この味に似たものを思い出した。

「クーって、タルトの味がする」

「ぶっ！？」

熱いハーブティーを飲んでいた彼は、無邪気な彼女の発言のせいで多に咽た。

「機嫌が良い時は苺味で、悪い時はラズベリー！」とフォークに刺した苺を揺らす彼女は、何て言えばいいのか分からないコースの口にそれを放り込む——ああ、なんて行儀の悪い。

「お、おまつ、お前……！いいか、それを他所様で言うんじゃないぞ！？」

「どうして？」

「——考えても御覧なさいよ。『私の駄犬って苺味なの』なんて厭らしく聞こえるでしょうに」

ふわっと、銀と紫の光の中から古城の主——今日はワンピースにカーディガンを着た、ルーシエットがにやにやと笑いながら現れる。髪を結わずにそのまま下ろした彼女は、自慢の黒髪を風に遊ばせながらマドレーヌに手を伸ばした。

そしてリーンの隣に腰掛けて、そのまま口に小さく含む。

「厭らしい……厭らしい」って、何ですか？

「聞くな！いや、知らなくていい！！」

「私が教えて差し上げましょうか？」

「余計な事をするなっこいつの教育上良くないんだよ！」

バンッとテーブルを叩くクースの目の前で、リーンはやっぱり危なげにハーブティーをもう一杯淹れて、ルーシエットに手渡した。ルーシエットは彼女の頬に感謝のキスをしてから、ふう、とハーブティーに息を吹きかけた。

「そんなんだから、貴方はいつまでたっても『保護者』なのよ」

「クーは私のお父さん？」

「ちが…うん、違…。いいからお前は黙ってタルトを食べてなさい。ほら、」

「否定出来て無いわよ……そういう所からもう駄目よね。甘やかし過ぎ」

「うつせえな」

私にも切り分けなさい、と皿を指すと、クースは舌打ちをしながら言う通りに切り分ける。

乱暴にルーシエットの前に置くと、彼は苛立ちを誤魔化すようにタルトを口に入れた。

「…そうだ、騎士様はどうです？」

「今？多分薬の副作用で寝てるわよ。薔薇の棘やら何やらで深く腕を裂いてたから——あの時は大雑把に直したただだから、剣を握る仕事を続けたければ動かすなって言っておいたわ」

「……だっせ——痛ッ、ため、クソガキ！フォークで刺すな！」

「口を慎みなさい駄犬が！」

昨日の喧嘩の続きをし始めそうな二人の傍で、リーンは相変わらぬのんびりとしていた。

お茶をそろそろと飲むと、ルーシエットは思い出したような声をあげた。

「そうだね。リーンが相手にしたあの男んだけど、さっき目を覚ましたそうよ」

「案外早かったな——…リーン、お前、加害者なんだからもう少し関心を持て」
「う？」

マドレーヌをもしかもしゃと食っていたリーンは不思議そうに首を傾げる。

「食べるー？」とマドレーヌを差し出してきた彼女の手を跳ね退けられず、しょうがないので受け取った。

「……で、どうだった？あの男は口を割ったか？」

「割ったわよ。直ぐに」

「…お前、何したんだよ」

「失礼ね、『場合によってはリーンを呼ぶ』って言ったらぺろっと吐いたのよ」

「……そうか」

—— 渋い顔でリーンを見遣れば、彼女は我関せずと言わんばかりに、陽の光の中で少し寝むそうである。

「あのクソババアの命だったようね。現在の状況を見たかったよう

よ。攻撃的だったのについても同じく。手札を知りたかったってね」
「あっそ」

「しばらくは警戒しておいて。私も結界を強めておくけど、結界専門の人間がきたら解かれる危険性がある。……内部犯については、私の結界がどうのこうの言えないもの」

『内部犯』とはルーシェットの古城にて働く、ほんの一握りの『人間』の事である。

彼らは王妃の手下として、もしくは粗相をしてお咎めとしてこの城に手配された人間——当然、ルーシェットに忠誠を誓う訳が無い。

しかし、ルーシェットの魔法によって動く人形の使用人では細かい雑事が出来ないで、彼女はしぶしぶ城からの人間を引き受けている。……危険なので自分の身近には置かないが。

ちなみに、クースとリーンの傍にも彼らは仕えていない。

リーンはクースが甲斐甲斐しく世話をしているし、クースに限っては使用人が扱い難くて傍に置かないのだ。

「——また俺、人間の使用人に死神だ殺人鬼だって詰られるのか」

クースはこの城の守り手として、外部と内部の安寧を守らなければならない。

その為、一部の使用人が不審な動きをしたら問い詰め——その

是非では殺さねばいけないので、彼はある意味「身近な死神」としてルーシエットよりも怖がられている。

最初の頃、ルーシエットにこれを命じられた時は唾を吐き捨てたい程に嫌だった——が、この城は少しの不便と苛立ちを無視すれば好条件の物件だった。

自分たちの正体を隠さなくていいし、リーンにちょっかいをかける男はいない。とりあえずやる事やっておけば普段は安心だ。

……何よりリーンが此処に居たいというのなら居させてあげたい——家主が気に食わないが。

以上の理由からクースは必要とあれば使用人を斬り捨て、外部からの侵入者も斬り捨てた。その際に何て吐き捨てられるのかも大体予想が出来るくらいにはなった。

それでも平気な顔をしていられるのは——元々の彼の性格と、その後リーンがべつたりと甘やかしてくれるからだったりする。

「…騎士様には、今回の事…？」

「言っておいたわ。今後は出入りに気をつけるよう、…駄犬と一緒に騒がないように言っておいたから」

「あゝあ！？」

またバンとテーブルを叩くと、リーンのハーブティーが零れて彼女の白い手にかかる。

びくつと熱さに顔を顰めたリーンに、クースは「わ、悪い…今冷やすからな！」と先程の怒りも忘れて厨房の奥に走る。
濡れたハンカチをわたわたと白い手にかけると、彼女はひやっとした感覚に震えた。

「後で薬を塗ろう。…痛くないか？」

「平気。ツンツンする」

「ツンツンって何よ…まったく、惚れた弱みってこういう事よねえ、駄犬君？」

「あ？」

「過保護も嫌な命令も渋々引き受けるのも、全部——…あーあ、羨ましいいったら！」

話はこれでお終い、とルーシエットは椅子から立ち上がる。

二人の顔も見ずに去ろうとするのをリーンが引き留める。何とも言えない顔のルーシエットにバスケットを渡すと、にっこり微笑んだ。

「騎士様に。小さいですけど木苺のタルトと、このマドレーヌが入ってます。騎士様と一緒に食べるかなって思って、大目に作ったんですよ！」

「……ありがとう」

両の腕で抱きしめて、ルーシエットは眩しい彼女に微笑んだ。

いつもいつも羨ましいと思ってても、それでも嫌いになれないのは——
——彼女のこういう一面からだろう。彼女の温かさがくすぐったい。

ルーシエットは「ほん、とわざとらしく咳を出すと、登場と同じく銀と紫の光の中に溶けていった。

*

「——痛っ、…あーもー、ページ捲るの辛い…」

暇潰しに持って来た本をぽんと置いて、ロストは暇すぎて死にそうだった。そして健常さの有難さを今更ながらに実感した。

読み込んだ後の残る小説は、もう続きがどうなるのか分かっているせいか味気ない——実は、彼はこれ以外の本を持っていないのだ。

鍛錬に忙しく、王の護衛に歩き回り…仕事が終わる頃には夕餉の支度が忙しい。

休みの日に本屋に寄っても、どれがいいのか決められず、時間が迫って断念する事も多い。…料理の本なら無駄にあるのだが。

一応、そんな彼でも教養のある——貴族の出である。人々の描く、優雅な生活のゆの字もないのが悲しい。

「……ねえ、起きてる?」

溜息を吐いてしばらく。

控えめに扉をノックした後、古城の主である魔女、ルーシエットが扉の向こうから尋ねた。

ロストはパツと喜色満面に、花でも飛んδειそんな声で返事をした。
……実は、彼は寂しがり屋なのである。

「お腹空いてるかしら——…って、その汚らしい本、もしかしなくとも読んでいたの?」

「……え、へへ……」

「言っただけでしょう。騎士でいたかったら動くなつて。…貴方がそんなに職を失いたくないなんて思わなかったわ」

ぽふ、とロストの隣、ベッドの端に腰を下ろすと、彼女は「口開けて」とだけ言う。恐る恐るロストが口を開けると——

「もふっ!?!」

「美味しい? 美味しいわよね、私が持ってきてあげたのだもの。美味いでしょう?」

ぐいぐいと押し入れるルーシエットに何とか頷くと、彼女は「そう」

とだけ言つて「お茶を淹れましょう」と手を離す。

流石にこの城の主に淹れてもらうのは…と躊躇つておろおろ（今だ口にマドレーヌが入っている為）していると、その傍らで彼女は指をパチンと鳴らす。

銀と紫の燐紛が花咲くように溢れると、中からカップやポットと一式現れた。

——おどけるような、遊ぶような動きでカップはくるくると回ったり、はたまたよろよろとうついていて、ポットは蓋をカタカタと鳴らしながら忙しくあちこちへと酔っぱらいのようにお茶を注いでいく。

砂糖は玉入れのように放り込まれ、スプーンはよっこらしよ、と紅茶の中に入ると優雅に回った。

「おお——！？」

ロストはその騒々しい舞踏会のような、はたまた祭りのような野生さも見えるカップ達の騒ぎに目を輝かせた。

彼自身魔法は使えず、知人は戦闘に使えるような——粗野な魔法しか使えないので、こういった優雅な魔法を見ると思わず感激してしまう。

目の前にまでやって来たカップに思わず拍手をすると痛みが——
——頭部と腕に走る。

手は当然ながら。頭は……ルーシエットである。

「もう!どうして人の言う事が聞けないの!」

「う、ごめん…君の魔法に感動して……」

「——ふん!」

ぶいっとそっぽ向く彼女にどうしたものかと悩むと、その白い頬が薄ら赤く染まっているのに気付く。

照れ隠しかと思うと可愛い——思わず笑いそうになって、慌てて口を噤んだ。前回それをして気絶したのを忘れた訳ではない。

ロストは苦笑いを浮かべると、今だ騒いでいるカップ達を見遣った。

「……でも、君の魔法は不思議だなあ……」

「……?魔法って、不思議なものでしょう?」

「ああ、そういう意味じゃなくて、君の魔法は…何て言うのかな、微笑ましいというか」

「……昨日のあの惨状を見て、それを言う…?」

すいっとルーシエットはロストの肩に手を置くと、空いた手で彼の唇に人差し指を当てた。

「ねえ、私が今此处で、貴方の……」

唇から胸に、心臓の辺りをきゅう、と掴んで、彼女は伏せ目で続けた。

「貴方の、此処を——貫いたら？ 決り取ったら？ 死の呪いをかけたら……？ それでも貴方、同じ事言えるの……？」

「んー、言えないかなあ……」

「——でしょ」

「だって、多分、痛いとかの前に喋れないじゃないか。死んじやつて。でもきつと綺麗だなぁって思っではいると思うよ。憎いとかそういうの抜きに」

「……………」

きよとん、とした彼女の口に、お返しとばかりにマドレーヌを突っ込む。

むー！と唸る彼女はもう年相応の顔で、ロストはこっそりと、ほつと息を吐いた。

「……けほ、……貴方、人間として何か抜けてんじやないの！」

「綺麗なものは綺麗。可愛いものは可愛いでもいいじゃないか。そこに嫌な感情は無い筈だよ」

「あるわよっそんなのおかしい！」

「あー……じゃあ分かった！ きつとルーシェットの魔法だからじゃないかな——痛い痛い手を握らないで」

このタラシ！馬鹿馬鹿と布団をばふばふと叩くルーシェットの頭をぽんぽんと撫でると、彼女は一瞬気持ち良さそうに目を閉じかけ……きゅ、と唇を噛むと、彼の手を両手で外す。

「もうこの話はやめる！ 食べるわよっ」と一方的に打ち切ると、彼女はバスケットに掛けていた布のもう半分——つまりバスケットの中全部がロストの目に入った。

「わー！木苺のタルトだね！…あ、ルーシエットが作ってくれたの？」

「いいえ。リーンよ。あの子は料理上手だから…私はクッキーぐらいしか作れないし…」

「そうなの？じゃあ今度はルーシエットのクッキーを食べてみたいな」

「そ、そんな美味しくないわよ！リーンみたいにお店のお菓子みたいな味しないし…ちっちゃい子が作った…ような、味がするし」

小さな、片手に乗せられる程のサイズのタルトを取り出しながら、ルーシエットはもじもじと言った。

——彼女はずっと魔法の勉強をしてきた。生きる為に必要な知識、力を求め…その中に、料理の知識は無い。

クッキーだって幼い頃作っているのを見て、ほんの少し手伝っただけ。それを懐かしんで記憶を頼りに作ろうとして……何度も失敗していた時に、リーンの助けを借りてやっと出来たのだ。

…自分には、女の子らしい事の一つも出来ないのかと泣きそうになった瞬間でもある。

「それでもきつと美味しいよ。ルーシエットが一生懸命作ってくれたのなら」

「……そう、かな」

「そつだよ。……あ、このタルト美味しいね！」

照れを隠すようにタルトを頬張る彼に、彼女は――穏やかに、微笑んだ。

ふ、と力が抜けるような。儚さすら感じる微笑みだった。その瞳は追慕と無くしたものを悲しむような色さえあり……それでいて、どこか優しい。

――きつと、この繊細さこそが彼女ル・シエットなのだ。

唐突に分かった。

怒りっぽく、照れ隠しが乱暴――それもきつと、彼女。彼女の一面で、昨日のあの時のような冷酷さも時を重ねて彼女の一面になったのだろう。

でも、その本当に底、虚飾を取り払った先には、弱弱い花のような少女が沈んでいる。

「……じゃあ、私も頑張るから、貴方も私に何か振舞って頂戴な」

その言葉に、ロストははっとして頷く。

お菓子作りは得意なんだよ、と胸を張ると、彼女は鈴を転がすような笑い声をあげた。

「絶対よ？…楽しみに、してるから」

*

(甘酸っぱい古城)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284h/>

Marchen der Prinzessin ~お姫様の御伽話~

2011年11月17日12時32分発行